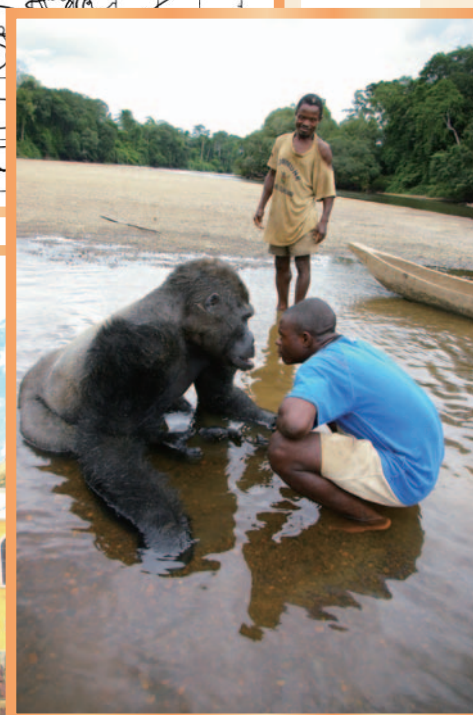
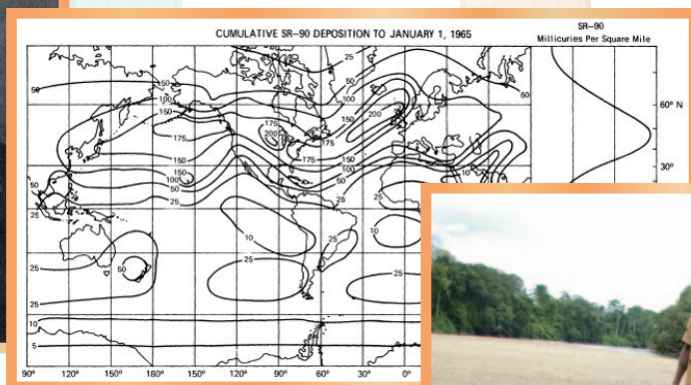
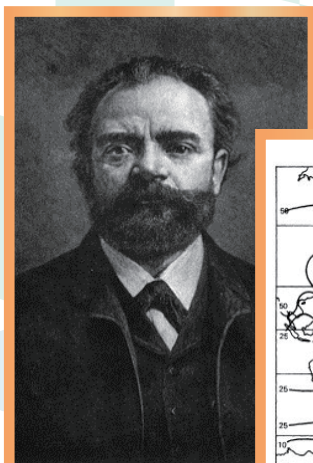


# せめぎあう眼差し

— 相関する地域を読み解く —

福田 宏・柳澤雅之 編





CIAS Discussion Paper No.56

# せめぎあう眼差し

— 相関する地域を読み解く —

福田 宏・柳澤 雅之編著



京都大学地域研究統合情報センター



# 目次

## 趣旨説明

せめぎあう眼差し

—— 相関する地域を読み解く ——

福田 宏 ..... 1

## ■ 研究報告

「人類の時代」における「地域性」

—— アメリカの核戦略と放射能汚染問題 ——

樋口 敏 広 ..... 5

ドヴォジャークの「辺境」とチェコから見た「新世界」

福田 宏 ..... 13

ゴリラから読み解くカメルーン

—— 狩猟と農耕の相関性 ——

大石 高 典 ..... 21

ボリビア鉱業の「国有化」をめぐるねじれ

岡田 勇 ..... 29

## ■ コメントと総合討論

コメント ..... 37

リプライ ..... 39

総合討論 ..... 47

プロフィール ..... 51



## 刊行にあたって

本ディスカッション・ペーパーは、京都大学地域研究統合情報センター（地域研）が主催したワークショップ『せめぎあう眼差し—相関する地域を読み解く』（2015年4月25日・京都大学稲盛財団記念館）の記録です。

地域研は2006年に設立されて以降、特定地域を対象とする地域研究組織との地域横断的および関連学問分野の研究組織との分野横断的な研究活動（相関型地域研究）、さらに情報学を駆使した地域研究情報の共有と分析により地域を多角的に捉える手法の確立（地域情報学）をミッションに掲げた研究活動を展開しています。また地域研は、地域研究コンソーシアムなどの地域研究コミュニティに開かれた活動を行う全国共同利用施設としての役割も担っています。毎年4月末には、公募による共同研究のメンバーが一堂に会し、各ユニットの研究成果について報告すると共に、特定のテーマを掲げてワークショップを開催していますが、2015年のワークショップでは、「せめぎあう眼差し」と題し、地域と地域の相関性に着目した議論を行いました。

冷戦終了から既に30年近い年月を経ましたが、世界における対立はますます深刻化してきているように思います。大量の情報が飛び交い、人やモノが容易に国境を越えて移動する時代となりましたが、その一方では、宗教や民族、あるいは地域の違いが先鋭化し、テロや紛争に至るケースが増えてきています。今回のワークショップでは、専門とする地域や分野が異なる4人の研究者が報告を行い、アメリカから見た世界、あるいはチェコから見たアメリカといった観点から、地域と地域（または集団と集団）の関係性について検討しました。普段は一緒に議論をすることの少ないテーマを組み合わせることにより、今後の地域研究を考えるうえでのブレインストーミングが実現できたのではないかと思います。

本ディスカッション・ペーパーは、これら発表された4本の報告と総合討論から構成されています。総合討論におけるコメンテータには、社会人類学の観点からアフリカを研究されている大阪大学の栗本英世先生とトルコを専門とされているアジア経済研究所の村上薫先生をお迎えし、大変貴重な御意見を頂きました。

最後になりましたが、コメントを下さった両先生、そして御参加頂いたすべての方に、この場をお借りして御礼申し上げます。このディスカッション・ペーパーにより、ワークショップの様子が多少なりともお伝えできればと考える次第です。今後とも、さらなる地域研究の発展につながるように、みなさまの御指導・御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター・センター長）

福田 宏（愛知教育大学地域社会システム講座・講師）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター・准教授）





# 趣旨説明

## せめぎあう眼差し——関連する地域を読み解く

福田 宏

愛知教育大学・地域社会システム講座・講師

### 1. 眼差しから読み解く地域

2015年4月25日、地域研にて恒例の共同研究ワークショップが行われました。今回のワークショップでは、私たちは「せめぎあう眼差し」というタイトルを掲げ、地域や集団そのものではなく、それらの関係性に着目した議論を行いました。

インターネットが爆発的に普及した現在では、専門家であろうがなかろうが、遠く離れた地域についても簡単に知ることができます。しかし、ネット上には様々な見方が溢れています。中には誤解や偏見に満ちた情報もあるでしょう。私たちは、何でも知り、自由に発言できるようでいて、実際にはそうでないかもしれません。では、地域の専門家である地域研究者が、ウィキペディアなどに掲載されている誤った情報を修正し、世界各地について「正しい」知識を提供すれば、それで問題が解決するのでしょうか。もちろん、そうしたことも必要かもしれませんが、そこには大きな落とし穴が潜んでいるように思います。その点について考えてみるために、本ワークショップでは、もっと根本的な疑問、すなわち地域を研究し理解するとは何か、について検討しました。

言うまでもないことですが、私たちは神の視点に立って他者を見ているわけではありません。個人と個人の間であれば、両者は具体的な関係性の中でお互いを理解しています（或いは、理解したと認識します）。集団の間においては、それが更に多層的となるでしょう。職場や学校、自治体などのレベルから、国家や宗教、ヨーロッパやアジアといった地域のレベルにおいても、人々は関係性の網の目の中で他者を理解していると言えます。

2015年1月に発生したパリのテロ事件は、その点を改めて考えるきっかけとなりました。イスラム教の預言者ムハンマドの風刺画を掲載したフランスの週刊紙『シャルリ・エブド』の本社が襲撃された、あの事件です。犠牲者を悼む追悼のデモにはフランス全土で約370万人が参加したと言われています。その時掲げられた「私はシャルリ」というスローガ

ンは、「表現の自由」や「テロに対する反対」の代名詞として世界中に広まりました。

しかしながら、ムハンマドの風刺画は表現による暴力ではないかという批判もあります。言うまでもなく、物理的な暴力によって表現を圧殺することは如何なる場合においても容認されるものではありません。けれども、偶像崇拜を禁ずるイスラム教に対して配慮に欠けた風刺画を掲載することは、冒瀆と見なされかねない行為です。テロに反対するのは当然のことだとしても、表現の自由がどこまで許容されるかについては慎重に考える必要があるでしょう。

さらに、ここで重要なことは、フランス（あるいは西洋一般）とイスラムという対立の図式そのものだと言えます。テロ事件後、『シャルリ・エブド』は特別号の表紙で再びムハンマドを描き、涙を流す預言者に「私はシャルリ」と書かれた紙を持たせました。同紙に掲載された風刺画においては、あたかもフランス（あるいは西洋一般）とイスラムという明確に異なる二者が存在し、その二者の間には越えがたい境界線が存在しているように見えます。では、フランスとは一体誰であり、イスラムとは誰なのでしょう。襲撃事件で射殺された3人の容疑者たちは、過激思想に染まっていたとはいえ、イスラム系移民の二世であり、フランスで育った若者でした。シャルリ・エブドの本社前で殺された警察官のなかにもイスラム教徒が含まれていました。それにもかかわらず、イスラムに対する固定観念が強化され、我々と「奴ら」が明確に区分され、「奴ら」の中にイスラムという存在が押しこめられていく。フランスの家族人類学者、エマニュエル・トッドは、当時の状況を以下のように描写しています。

[2015年1月の] 殺戮が、われわれの国の歴史に類例のない集団的反応を引き起こした。[...] さまざまなメディアがいつになく一致し、こぞってテロリズムを告発し、フランス人民の素晴らしさを讃え、自由と共和国を神聖視した。『シャルリ・エブド』と、『シャルリ・エブド』がムハンマドを風刺した画が聖域化された。[...] 高校生が政府の決めた一分間の黙祷を拒否すると、それがどんな拒否であろうとも一律に、テロリズムの暗黙の擁護、および国民共同体への参加の拒否と解釈

された<sup>1</sup>。

トッドの著書がフランスで刊行されたのは2015年5月のことでしたが、刊行直後から多くのメディアで「激昂のリアクション」が起こったようです。問題を単純化し、全てを二項対立で捉えるような動きに対して、トッドは冷静な対応を求めました。しかしながら、こうした行動はフランス社会で異端視され、激烈な批判の対象となってしまったのです。

これはフランスだけの問題ではないでしょう。繰り返しになりますが、テロを容認すべきではありません。けれども、憎むべき相手として「奴ら」を想定し、「奴ら」を社会から排除するだけでは、問題は解決できないように思われます。たとえテロの可能性が存在したとしても、実際に暴力に訴える人間は全体から見れば少数に過ぎません。それにもかかわらず、テロとは全く無縁の市民までもが、マイノリティの立場に置かれ、時として「奴ら」の地位に貶められていくのであれば、そこに新たな憎悪が生まれ、対立が創出されていくことになります。「テロとの戦い」が声高に叫ばれる社会においては、この危険は遥かに高いものとなるでしょう。

このワークショップでは、こうした我々と彼ら／彼女ら（あるいは奴ら）の関係性に着目しています。といっても、テロリズムに対して具体的な処方箋を提示する、ということではありません。ここでは、彼ら／彼女らという存在が認識され、関係性が生み出される過程に焦点が当てられています。具体的に言えば、超大国アメリカと世界各地との関係、チェコとアメリカにおける三者関係の交差、カメルーンにおける狩猟採集民と農耕民の関係、ボリビア鉱業における政労使の「ねじれた」関係、の四つの事例となります。以下、個々の報告について概要を説明したいと思います。

## 2. ワークショップにおける報告

最初の樋口報告では、1950年代の核実験による放射能汚染が素材として取り上げられました。全世界の汚染状況を明らかにしようとしたアメリカの科学者は、世界各地と向き合うことにより、それぞれの地域が抱える個別の問題にぶつかります。第二次世

界大戦以降、アメリカは超大国として世界を俯瞰する形の眼差しを持ち続けてきましたが、放射能汚染という科学的観点であったとしても、それによって世界の全ての地域がフラットに捉えられるわけではありません。むしろ、「地域の逆襲」とでも言うべき現象の発生が樋口報告で指摘されています。

当時におけるアメリカの調査は、主としてストロンチウム90の分布状況を調べるものだったのですが、人間の摂取状況を明らかにするために乳製品がサンプリングの対象とされていました。これに対し、日本の研究者は、玄米が牛乳の数倍も汚染されているという調査発表を行い、乳製品中心の調査手法に異議を唱えます。当時は、水爆実験によるビキニ環礁の被爆事件が発生し、日本において反核感情が高まっていた時期でもありました。この論争は、玄米か牛乳かという単に技術的な問題にとどまるものではなく、アメリカと日本の政治的せめぎあいを象徴するものでもあったと言えるでしょう。樋口報告では、こうした事例が取り上げられ、超大国アメリカと世界各地との関係性について分析が行われました。

次の福田報告では、19世紀のチェコ人作曲家ドヴォジャークに焦点が当てられ、中心と周辺、その狭間という三つの関係について検討されました。チェコは西ヨーロッパの中心的地域から見れば周辺の存在と位置づけられますが、ロシアやウクライナなどの東方地域から見ればヨーロッパの中央とも見なされる場所です。ドヴォジャークは、狭間とでも表現しうるチェコに生まれたわけですが、ここで興味深いのは、彼がアメリカ合衆国に渡り、そちらの音楽にも大きな刺激を与えた点です。当時のアメリカは今よりもはるかに白人中心（より正確にはWASP男性中心）の社会でしたが、現在のような大国では全くなく、ヨーロッパに対して或る種のコンプレックスを抱くという状況でした。その点において、アメリカの白人も狭間のポジションに位置していたということになります。

ところが、音楽の指導者として招かれたドヴォジャークは、アメリカ社会の最下層に置かれていた先住民や黒人のなかに豊かな音楽文化を「発見」し、これこそがアメリカ音楽であると主張しました。当然のことながら、アメリカ社会の主流派は、こうしたドヴォジャークの発言に対し自国文化を貶めるものとして猛反発します。結果としてドヴォジャークという一人の作曲家は、チェコとアメリカという二つの場のそれぞれにおいて、中心・周辺・狭間という三者の関係性に揺らぎを生じさせたことになりました。

三番目の大石報告では、カメルーン東南部におけ

1 エマニュエル・トッド著、堀茂樹訳『シャルリとは誰か？』文春新書、2016年、24頁。なお、原書のサブタイトルは「宗教的危機の社会学（Sociologie d'une crise religieuse）」だが、邦訳書のサブタイトルは「人種差別と没落する西欧」（傍点は引用者）に変更されており、本書の価値を大幅に損なっているように思われる。

る集団間の関係性に焦点が当てられました。熱帯森林に住む狩猟採集民のバカ・ピグミーと農耕民のバクウェレは、お互いに対立しながらも、物々交換などの関係を有しつつ共存しています。狩猟採集民や農耕民といっても、バカ・ピグミーの活動には定住集落における農耕が含まれますし、バクウェレも狩猟採集を含む森林の中での活動を活発に行っています。その点においても両者の生活領域は大変近接していると言えるのですが、正式の通婚関係はなく、相互の差異やアイデンティティが長年にわたって維持されてきています。

以上のような関係を考えるうえで、実は動物のゴリラが重要性を持っているのかもしれませんが。バカ・ピグミーとバクウェレの間では、相手をゴリラに喩え、相互に負のイメージを投げつけ合うといった行為が見られます。例えば、バカ・ピグミーはバクウェレを「人間ゴリラ」と呼んだりしますが、それによって「ままならぬ他者」との対立が象徴的に表現される一方、バクウェレとの二者対立を曖昧化する効果ももたらされています。つまり、両者の対立的な眼差しがゴリラという第三者を介することによって、敵と味方の境界線がぼやかされ、決定的な対立が回避されているのではないか。大石報告では、分離的共存のカギを握る存在としてゴリラに焦点が当てられ、その表象について分析が行われました。

最後の岡田報告では、ボリビアの鉱山に焦点が当てられ、複雑な政労使関係の実態が明らかにされました。この国では、グローバリゼーションや国際価格の変動によって資源ナショナリズムが触発されるという単純な構図ではなく、更に「ねじれた」関係が生まれています。

現在のボリビア鉱業においては、国営鉱山、民間鉱山、協同組合の三つの形態が存在します。国営鉱山は、1952年に革命政権が成立した際に誕生しましたが、現在では三つほどしか残っておらず、基本的に赤字生産という状況です。民間鉱山についても、様々なインセンティブが導入されたにもかかわらず数は多くありません。これに対して鉱山の圧倒的多数を占めるのは協同組合です。その殆どは零細経営であり、廃業された後の鉱山を不法占拠したり、あるいは独自に採掘権を獲得したりするケースが見られます。手作業で採掘を行っているところもあります。

鉱物資源の価格が国際的なレベルで変動する以上、ボリビアもまた、その影響を大きく受けるのですが、ボリビアでは上述のような形で鉱業の形態が多様化しているために、利害関係も錯綜しています。時としてダイナマイトを持って街頭活動が行われるような緊迫した状況の中で、いかにして政労使間の駆け

引きが行われ、政策が決定されているのか。岡田報告では、こうしたボリビア鉱業におけるせめぎあいについて検討が行われました。

### 3. 総合討論を踏まえて

以上見てきたように、ここでは分野も地域も異なる四名の研究者が報告を行いました。地域研らしい学際的かつ地域横断的なワークショップと言えますが、コメンテータ泣かせのプログラムでもあります。今回のワークショップで、全ての報告をまとめてコメントするという難しい役割を引き受けて下さったのは、アフリカ民族誌を専門とされる栗本英世氏（大阪大学）とトルコ地域を専門とされる村上薫氏（アジア経済研究所）のお二人でした。この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。

最初にコメントを出された村上氏は、力の差がある集団と集団、あるいは地域と地域の関係の中で、より平等な関係に向かっているヘゲモニーの変容は可能であるか、という点を指摘されました。樋口報告で紹介されたように、超大国のアメリカであっても、世界に対する関係性は一方的なものではなく、見られる側の地域が一種の「逆襲」を行うケースが存在しますし、福田報告で挙げられたように、「辺境」の作曲家とも見られていたチェコのドヴォジャークが、アメリカに渡って「新世界」の文化的ヘゲモニーに揺らぎをもたらしたという事例もあります。さらに大石報告で言及されたカメルーンのケースでは、二つの集団が対立しながらも共存しているのに対し、岡田報告で取り上げられたボリビアでは、敵対するアクター間の均衡が維持し切れておらず、一種の失敗例として捉えられます。このように村上氏は、ヘゲモニーというキーワードの提示により、四つの報告を理解するうえで重要な助けとなる補助線を引いて下さいました。

次に栗本氏は、それぞれの報告に対して、科学・身体・動物・共同性という四つのキーワードを示され、村上氏の補助線を肉付けして議論全体を豊かにする役割を担って下さいました。樋口報告における放射能汚染の問題は、国際政治の議論のみにとどまらず、科学者自身の論理と眼差しに焦点を当てることにもつながっていますし、福田報告で紹介された作曲家の肖像は、ヘゲモニーの内実が身体表象の問題として表れることを想起させます。また、大石報告で指摘されたように、我々と彼ら／彼女らの関係性のなかに動物も含まれるという点は、地球環境における自然と人間の共生を考えるうえで重要だと言えま

す。岡田報告では、政労使の敵対的な関係が強調されましたが、それもまた一つ関係性であり、大きな意味での共同性に包含されると考えられます。このように栗本氏は、各報告者が言及しながらも、十分に自覚できていなかった論点を明確化し、全体の議論に接続する作業をして下さいました。

総合討論では、以上のコメントに対して各報告者が回答し、会場からも多数の質問が寄せられる中で議論が展開されました。詳細については、本ディスカッション・ペーパーの「コメントと総合討論」をご覧くださいと思いますが、ここでは、栗本氏や大石氏によって指摘された研究者自身の眼差しについて触れておきたいと思ひます。

言うまでもないことですが、たとえ専門家であっても、超然とした立場から地域を見ているわけではなく、自らの出身や生活基盤を置く地域に縛られています。研究者自身の存在被拘束性と言っても良いでしょう。例えば、日本の国際政治学者が北京の国際会議で東アジア共同体の可能性について発言した際には、本人の意図がどうであれ、近隣諸国の研究者は発言の裏側を読み取ろうとするかもしれません。逆に、中国の学者が東京の会議で南シナ海について報告した際には、その政治的意図に注目が集まることでしょう。たとえ政治とは一見無関係の研究であったとしても、先進国の研究者がアフリカの自然保護を訴える論文を書くことにより、当該地域の住民に破壊的な影響がもたらされる可能性もあります。自然保護自体は良いことだとしても、機械的に人間の関与を排除すれば良いという話ではありません。大石報告で指摘されたように、カメルーンの森林において、複数の集団が現地の生態系を前提とした生活を長期にわたって営み、自然（ここではゴリラ）を介して一種の共生を実現しているのだとすれば、外部の研究者もその点を尊重する必要があるでしょう。冒頭で述べたように、一口に地域を観察し理解すると言っても、その内実は単純なものではありません。研究者も含めての話ですが、私たちは、「誰が」「どのような文脈で」「何を見ているのか」という点に常に注意していく必要があります。

再びパリに話を戻すことにしましょう。2015年1月の事件後、フランスは「テロとの戦争」への関与を深め、同年9月にはダーイシュ（イスラム国）に対する空爆を開始しました。とはいえ、テロの脅威がなくなったわけではありません。同年11月には、さらに大規模なテロ事件が発生し、130名もの死者を出す事態となりました。問題なのは、こうした状況が排外主義の伸張にもつながっている点です。同年

の秋頃から深刻化した難民の大量流入にも刺激される形で、フランスでは極右政党の国民戦線が勢いを増してきています。同党は、かねてより人の移動の自由を定めたシェンゲン協定の廃止を主張していましたが、「シャルリ・エブド」の襲撃事件後は、イスラム急進派と見られる二重国籍者からのフランス国籍の剥奪、過激派系のモスクの閉鎖、国境監視の強化なども声高に要求し始めました。11月の同時多発テロ以降、こうした主張がますます多くの支持を獲得するようになっていきます。

フランスの現状は楽観視できるようなものではありませんが、フランスだけがこのような状況に陥っているわけではありません。パリにおける同時多発テロの前夜、バイルートにおいても43名の死者を出すテロ事件が発生しています<sup>2</sup>。かつて「中東のパリ」と呼ばれた都市で発生した惨事ですが、この事件についての報道は十分なものではありませんでした。どちらかと言えば、パリのテロに関する圧倒的な量の報道によって、バイルートの悲劇はかき消されてしまったかのようです。それだけではありません。シリアの内戦、あるいは他の多数の国や地域においても、テロや紛争とは無関係であるはずの人々が理不尽な攻撃に晒され続けています。私たちは、その現実をどの程度知ることができているのでしょうか。「誰が」「どのような文脈で」「何を見ているのか」、そして「何を見ていないのか」。私たちは、眼差しの不在という点についても注意を払わなければなりません。

最後になりましたが、このシンポジウムを実施するにあたっては、多くの方々のご協力を得ることができました。ここで改めて感謝の意を表したいと思います。

2 酒井啓子「パリとシリアとイラクとバイルートの死者を悼む」(中東徒然日記)『ニューズウィーク日本版』2015年11月26日、<http://www.newsweekjapan.jp/column/sakai/2015/11/post-948.php> (2016年2月1日最終確認)。

# 「人類の時代」における「地域性」

## ——アメリカの核戦略と放射能汚染問題——

樋口 敏広

ジョージタウン大学・外交学院 (SFS)・助教

### 1. はじめに

私は地域研究を専門としているわけではなく、環境史という歴史研究の新しい一分野の研究者であります。環境史というのは自然の変化そのものを再構成する自然史とは異なり、その自然界と人間社会の関係性のあり方とその歴史的变化を双方の文脈、そしてその間の相互作用に基づいて理解しようというものです。具体的に申し上げますと、私は地球環境問題というカテゴリーの誕生に興味があります。第二次世界大戦後のしばらくの間、大気圏内核実験というのが行われていたのですが、それによって地球全体に放出された放射性降下物による地球全体の汚染という問題がありまして、これを事例として取り上げ、地球規模の環境変動がどのように可視化されて、それが解決されるべき課題としてどのように認識されたのか、もしくは認識されなかったのかということについて研究を進めております。

本日は、このような地球規模の環境変動という枠組みのなかから、地域のあり方や、その相関性、またその間のせめぎあう眼差しについて、皆さんと一緒に検討できればと思っております。その際に人間社会と自然界の関係を読み解く新たなキーワードとして、われわれ環境史研究者の間で最近注目を浴びている概念が、人類の時代という概念であります。この概念は、パウル・クルツェンというオランダの大気化学者、オゾンホール発見でノーベル化学賞を取った方の造語です。彼によりますと、46億年の地球史というのはすべて地層に刻まれていて、それは先カンブリア紀から始まり、ジュラ紀や白亜紀、いわゆる恐竜の時代を経て、今は新しい時代になっているのですが、彼はこれに加えて最近の時代を人新世と名付けるべきだと提案しています。つまり新たな地層年代として、人間が地球表面の地形や物質の構成や分布、生物の種の誕生や消滅といった地球の変化の主体となる、その変化が地層のなかに明確に刻まれるような新たな地層年代を認めるように提唱しております。つまり地球規模の環境変動というのは、人口爆発、新感染症の問題、オゾン層破壊、

種の絶滅、気候変動などいろいろあると思いますが、そのなかで私が地域について何か言えないかと思ったことは、こういうリスクの前では「地球は一つ」だという点です。つまり空間的、つまり地理的差異はもうないのだという言説があるわけです。では、このような人類の時代、つまり地球規模のリスクに直面するわれわれの時代において地域というのは果たしてあるのか。あるとすればどのような形態をとっているのか。その間にどのような相関性があり、その間にせめぎあう眼差しがあるとすれば、どういふものかということについて今回はグローバル・フォールアウトという私のテーマに引き付けてお話をしたいと思います。

### 2. もう一つの「地球環境問題」

最初に、グローバル・フォールアウトとは何かについて簡単に説明いたします。1945年から80年にかけて、アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国が約500回行った大気圏内核実験に伴って排出された人工放射性物質のなかで、核実験場とその周辺地域よりも離れた場所にまき散らされたものとされており、図1は、1963年に部分的核実験停止条約が結ばれる前に、大気圏内核実験が行われた実験場を示しています。この図が示しているように、グローバル・フォールアウトにより地球の放射線量の変化が起きたわけですが、それはいわゆるほかの地球環境問題、つまり無数の産業消費活動主体により引き起こされる現象とは異なり、少数の国家による軍事安全保障上の行為が全世界に影響を与えるという特殊な例と言えます。この軍事対立と紛争という文脈というのはなかなか地球環境問題には出てこないのですが、このような特殊な例を扱うことで、せめぎあう眼差しがなぜ激しくなったのか、もしくはほかの一般的な問題にこの特殊例を利用して、どのようなことが言えるかということを考えていきたいと思っております。

先ほど地球全体の環境変動と申し上げましたが、グローバル・フォールアウトは本当に全世界すべて

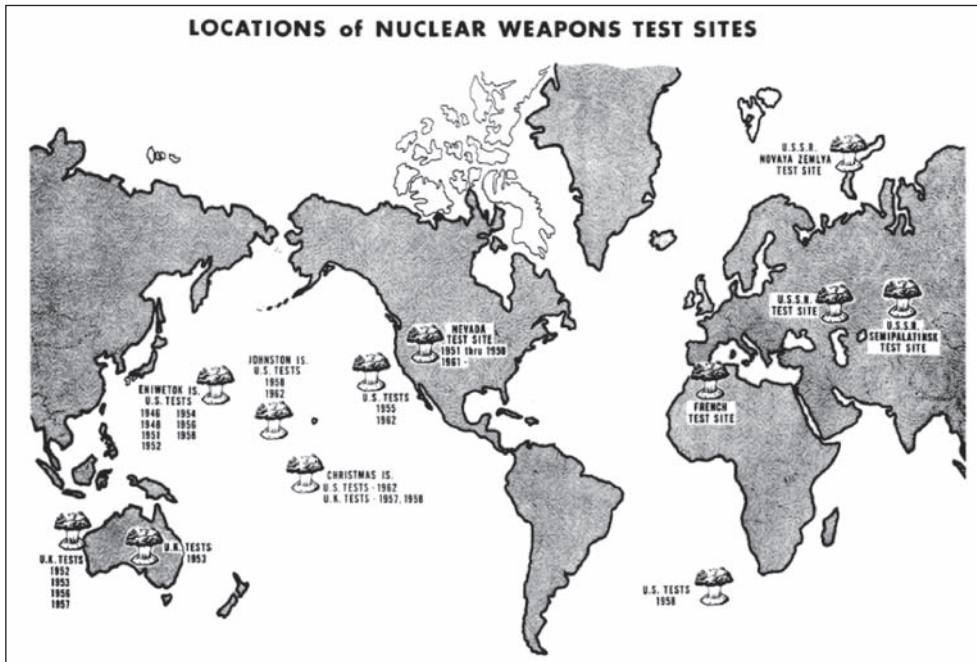


図1 大気圏内核実験が行われた場所

出典：Trinity Atomic Web Site

<http://www.abomb1.org/images/tstmap1a.gif> (2015年12月1日確認)

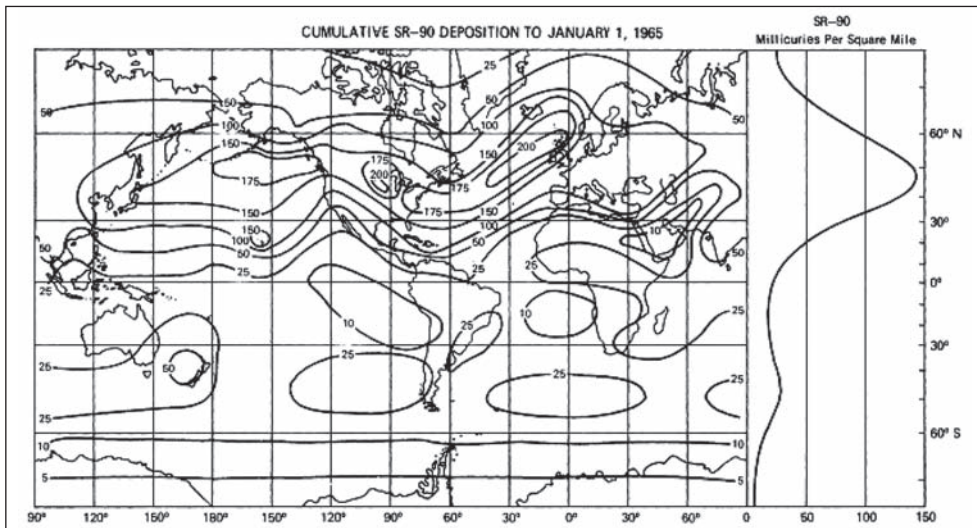


図2 ストロンチウム90の地表分布 (1965年)

出典：Lester Machta and John H. Harley, "Part II. Predictions of Radioactive Fallout and Fallout Dose Estimates," *Progress in Nuclear Energy, Series 12: Health Physics* (New York: Pergamon, 1969), vol. 2, p. 614.

の地域に影響を与えました。図2はストロンチウム90の分布ですが、これを見ると南極ですらわずかながら影響を受けていることがわかります。このように真に地球規模の環境変動が起きたわけです。先ほど申し上げましたが、グローバル・フォールアウトの排出国は5カ国ありまして、そのうちのアメリカに本日は注目したいと思います。この国が最大の排出国であったという点も重要ですが、せめぎあう眼差しという本日のテーマから見て興味深いのは、サンシャイン計画と呼ばれる世界各地の放射能汚染の

調査を独自に実施した唯一の国という点です。イギリスやソ連はこのような調査をする意図も能力もなかったのですが、アメリカはこれを実施しました。その狙いというのは、地球全体の汚染モデルを構築して、世界各地を放射能の濃度によって、単一の分布曲線上に把握しようとしたということがあります。つまり世界各地の違いというのを一つの地球の分布曲線に置き換えようとしたわけです。それはなぜなのかというお話を今からしますが、このようなグローバル・フォールアウトという地球規模のリスクを媒

介としてアメリカと各地域の相関関係、そのあいだのせめぎあう眼差しについてお話をしたいと思います。

### 3. 「地域性」の消滅？

まず、なぜアメリカは世界各地でそのような野心的な汚染調査を行ったのかという点です。これには二つ理由があります。一つは、全面核戦争への備えでした。放射能汚染は1945年のトリニティ実験以来、世界中に次第に広まっていたが、アメリカがその追跡調査を行ったそもその理由はそれ自体の健康被害への懸念ではなくて、それをむしろデータとして活用することで、いざ全面核戦争が起きたときに、一体、何発の核兵器を使えば、全世界、人類が絶滅するのかを予測しようとした背景がありました。これはまず1949年にガブリエル計画という理論研究として始まります。具体的にはストロンチウム90ががんの発症で一番重要であると当時は見なされていましたので、これの摂取の予測ということで全世界のモデルを作っておりました。ところが当時は全世界の動きを把握するようなデータというのがほとんどありませんでしたので、想定を重ねて算出せざるを得なかった。そのため、一体、何発の核兵器で全人類は絶滅するののかという想定の結果が驚くほど不確実になっておりました。たとえば全世界の人々が職業目的の最大許容量1マイクロキュリーを得る核分裂の威力は20メガトンから9万メガトンの間にあると最初は予測されておりましたが、この20メガトンというのは核実験で当時すでに排出されていた量に近かったわけです。

このような背景もありまして、アメリカの原子力委員会は1953年に当時核実験により既に世界中に拡散していたストロンチウム90のサンプリングを通じて、このようなモデルの不確実性を低減することを目的とするサンシャイン計画を開始しました。このサンシャイン計画の責任者を務めたのは放射性同位体による年代測定法を考案してノーベル賞を受賞したアメリカの化学者、ウィラード・リビーでした。政治的に反共保守であった彼は、アメリカが共産主義の膨張に対して全面核戦争も辞さないということで、それを抑止する必要があるということ、しかしその一方でそれによって全人類が減びることのないように、全世界の汚染状況を把握し、それを正確に予測する必要があることを訴えました。彼の態度というのはまさに世界を見る眼ですね。このサンシャイン計画を提案する際、彼は次のように言っていま

す。「結局のところ南アフリカのニグロが放射能を浴びていないかどうか本当に気にならないのか。まさにそれこそがガブリエルのポイントである。」つまり地球上ありとあらゆる人の汚染状況を把握するのが核大国アメリカの使命であるということでした。

アメリカが野心的な調査を行ったもう一つの理由は、核実験の継続の正当化にありました。1954年3月、サンシャイン計画が始まった1年後に太平洋上で行われたアメリカの水爆実験による日本人漁夫の被曝事件、いわゆるビキニ事件をきっかけとして日本をはじめとする世界各国がグローバル・フォールアウトの存在を認識するようになると、その危険への懸念と核軍備競争への懸念が重なり、核実験の継続に反対する声が世界中に高まりました。これを受けて大気圏内核実験による新型核兵器開発を共産陣営に対する核抑止の維持のために不可欠であると位置づけていたアメリカ政府は、サンシャイン計画によるサンプリングを拡充することで、地球全体の放射能汚染の状況を確実に把握し、それにより核実験の継続は危険ではないということを証明しようとしていました。リビーが述べているように、「汚染問題が正しく理解されないと核兵器実験が停止に追い込まれるかもしれない」という危機意識が背景にありました。先ほど申し上げたとおり、アメリカが一国で世界規模のサンプリングを行ったわけですが、これを可能としたのは第二次世界大戦後に、いわゆる世界帝国となったアメリカが保有する各種インフラでした。たとえば、先ほど挙げた図2は、土壌付近の空気のなかに含まれているストロンチウム90の量を示していますが、このサンプリング地点とはアメリカの軍事基地、在外公館、援助機関等のネットワークでした。つまりアメリカは地球全体を汚染するときに、既に地球全体に広がるインフラを有しておりました。一つ注目していただきたいのは、ソ連と中国は空っぽになっておりました、ここの部分の欠落というのはなかなか面白いのですが、それについてはもしご質問があれば質疑応答でお話させていただきたいと思います。

次に、これは人骨のなかにどれほどストロンチウム90が含まれているかというデータです（掲載省略）。ここで重要なのは、いわゆるアメリカのソフトパワーとされる開発援助、医療協力、教育協力といったつながりを利用して人骨を回収し、そのなかのストロンチウム90を量ろうとした点です。この調査では、インド、イラン、デンマーク、イギリス、ドイツ、イタリア、フランス、スイス、南アフリカ、ベネズエラなど、世界各地からサンプルが収集されました。

このように世界の汚染すべてを把握しようとしたアメリカでしたが、そのなかで特に問題となったのは、汚染が最大となる地域は地球のどこにあるかという問題でした。リビーとともにサンシャイン計画を主導した科学者ローレンス・クルップは1957年の米国議会の公聴会でこのように述べています。「近代都市社会に関する分布曲線は非常に狭いため、これらの計測結果の平均値を語ることは妥当であるが、マキシマム・マン、つまり世界中で最も汚染されている人は土壌におけるカルシウムの量が極端に少なく、そのような土地で自給自足的な生活を送っているような先住民、たとえばアマゾン上流のインディアン部族のなかで見つかるだろう」と予測しました。この発言後まもなくサンシャイン計画の担当者はラテンアメリカ各国に調査団を派遣しましたが、ここではその一つの例であるペルーについて紹介します。



図3 ペルーにおける計測地点  
出典：グーグル・マップより著者作成

図3に示されているのが計測地点です。このようにペルーという地域はアメリカにとって大事な情報、つまり緯度、経度、標高、降水量、そして標本によって表象されることで世界の分布曲線のなかに取り込まれたのです。そしてこのようなグローバル・フォールアウトによる地域という再編成は各機関の協力、特に冷戦期に世界中に拡散したアメリカの軍事、外交、援助、教育インフラと現地の権力者との協力によって可能になりました。クルップはこのようなマキシマム・マンの調査を踏まえ、世界全体の人骨に含まれるストロンチウム90の算術的平均（ここではMEANと示されている）と極大値（一番右側）を図4のようなグラフに示し、平均と極大との違いは約10倍以内に収まること、そしてたとえ極大値であっても許容量を大幅に下回るということを主張しまし

た。つまり世界中どの地点でも汚染は危険ではないということを証明しようとしたのです。さらにサンシャイン計画は単にいわゆる計測をするというだけではなく、予測も視野に入れる野心的なものでした。クルップがここに示している八つの変数（掲載省略）を特定しさえすれば、「たとえばバンコク、ニューヨーク、ケープタウンやアマゾンのジャングルに住んでいる12歳の男の子について、ある核実験により、1978年時点でどれほどのストロンチウム90が平均で見られるか、そしてそれぞれの地方における12歳の分布曲線を予測することは可能である」と述べました。つまりサンシャイン計画の究極の目標、つまり地球規模のリスクに対するアメリカの眼差しとは、世界すべての地域の汚染状況を自ら把握し予測することでその完璧な知識によってアメリカが全面核戦争も辞さない体制を構築すること、そして核実験の実施を可能とすることにあります。

#### 4. 地域の逆襲——事例としての日本とミネソタ

しかし、世界各地のさまざまな地域において、アメリカのそのような眼差しに対して異議が唱えられるようになりました。ここでは二つの例を紹介したいと思います。まずは日本です。日本は気流の関係上、北からはソ連の放射能、そして南からはアメリカの放射能が流れてくるという研究がビキニ事件以降、相次いでなされました。これは成層圏と対流圏のいろいろな微妙な違いによってこういうような研究の指摘がなされたのですが、それによってビキニ事件以来、日本国民の間で高まっていた、唯一の被爆国という言説と共鳴して、日本は死の灰の谷間であるという特別な被害者意識が高まっていました。つまり日本は地球規模のリスクのなかでも特殊な位置にいるのだという意識があったわけです。さらに日本の食生活においては、ストロンチウム90というのはカルシウムと似た動きを生体代謝のなかですのですが、ストロンチウム90を摂取するカルシウム源は西洋ではミルクや乳製品が中心ですが、当時の日本では魚や玄米が中心になっておりました。そういう食生活の違いということも日本の科学者のなかで強く意識されていました。ところがサンシャイン計画は80%のカルシウムが牛乳製品から摂取されるとの仮定により主に牛乳製品を中心に日本を含む世界中のサンプリングを行っていました。

これに異議を唱えたのが日本の水産学者であった東京大学の檜山義夫です。彼は、ビキニ事件が起きたあとに設置された「原子放射線の影響に関する国



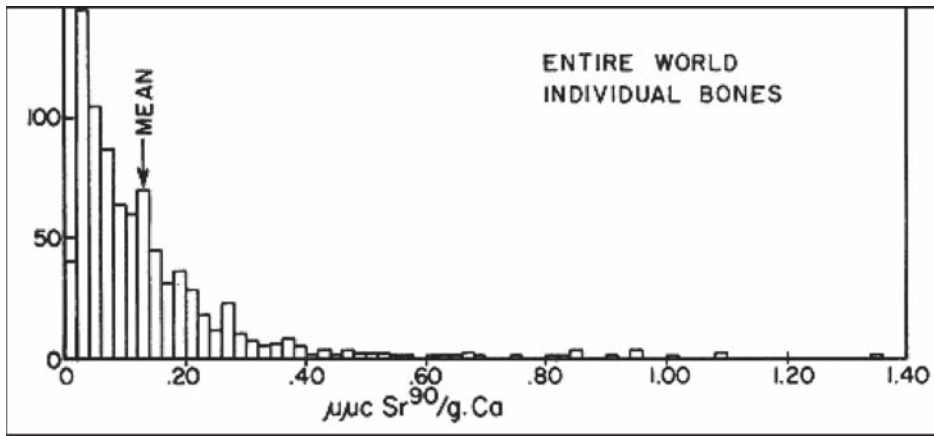


図4 人骨に含まれるストロンチウム90  
出典：J. Laurence Kulp, "Strontium in Man III," *Science* 129 (1959).

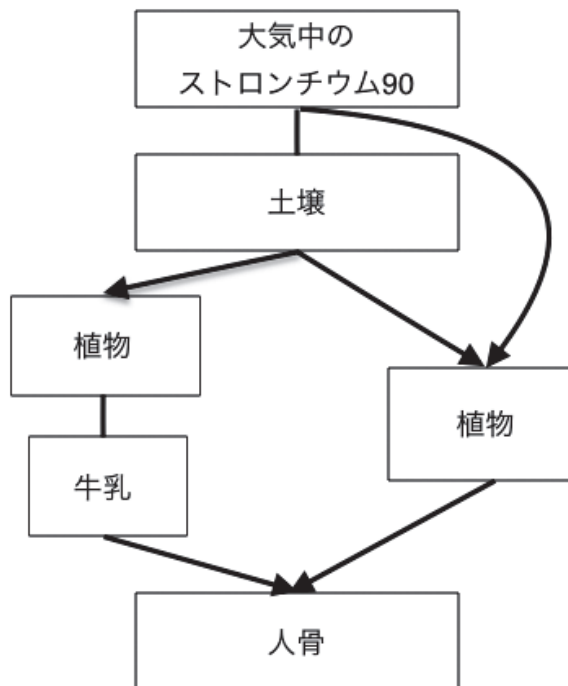


図5 食物連鎖とストロンチウムの移転

連科学委員会（UNSCEAR）」の日本次席代表でした。檜山は西側代表が牛乳以外のサンプリングを重視しないことに憤慨し、日本国内でさまざまな食材の大規模サンプリングを推進しました。このようなプロジェクトは日本政府がビキニ事件以来、反核感情を高めていた国内世論対策の一環として、核実験の禁止を求める外交政策に転換した時期とちょうど重なりました。つまり檜山の独自の汚染調査は日本の気象条件、食生活、唯一の被爆国という文化的言説、そして政府の核実験政策の転換という諸条件が重なることで可能となったわけです。この檜山の調査の結果、玄米がカルシウム1グラムあたりのストロンチウム90の量で牛乳の数倍も汚染されているということが分かりました。これは図5にも示されている

ように、牛乳の食物連鎖は左側になります。牛乳の食物連鎖の場合は中間経路によってストロンチウムの移転がある程度阻害されたのに対し、玄米の場合は稲の葉っぱの表面から取り込まれたストロンチウムがそのまま米に蓄積し、それを人間が直接摂取したためにストロンチウムが阻害されることなく人間に移転されたため、ストロンチウムの量が相対的に多かったわけです。ここで面白いのは、このような地球規模のリスクに遭遇して地域の特殊性が判明したわけですが、それをさらに伝統的な地域の区分けである、いわゆる東洋対西洋という形に転化して、日本はそれを国際的な発言力につなげようとしたことです。

国連の科学委員会の日本主席代表であった都築正

男は、委員会でこのような米食民族への不当なリスクを世界が認めるようアジアの各国に働きかけました。東京への秘密報告では、「同じく米を食べて育つ人々としてのインド代表団との提携から始まり、牛乳を飲んで育つ人々としてのイギリス代表団やアメリカ代表団などの説得など、隠れた努力がとにかく実ったことはわが代表団としては同慶に堪えない」と述べています。このように、リスクの差異が既存の伝統的な地域や他者というフレームと共鳴することによって日本がこのような発言力を得ることができ、そしてアメリカの眼差しに対抗することができたとと言えます。

次に、アメリカの内側からも実は地域というものが表出したことを紹介しましょう。ここで示されているのはミネソタ州ですが、ミネソタ州をはじめとするアメリカとカナダの中西部は地理的にネヴァダ州の核実験場から来るフォールアウトと、ジェット気流により運ばれるグローバル・フォールアウトが交差する地点にありました。またこの地域は小麦の穀倉地域としても知られており、その汚染状況への懸念が高まっていました。さらにミネソタ州の科学者共同体はリベラル色が強く、その科学者の多くは核実験に反対していました。このような地域の諸条件が重なった結果、これらの科学者は乳製品のサンプリングを重視するアメリカ原子力委員会のサンシャイン計画に反発し、ミネソタ州独自の汚染調査を行うことにしました。その中心となったのがマウリス・ヴィッシャーという生理学者です。彼は、ある人に宛てた私信の中で、「私はミネソタのような州における放射性降下物の構成と規模に関する独自の証拠を得ることが極めて重要であると確信している」と述べました。「私たちがしていることは核実験の結果を馬鹿にすること」、つまり原子力委員会は問題ないと言っていたわけですが、「馬鹿にすることは不誠実であるということの人々に知らしめる教育的価値があると思っている」と彼は考えていました。彼の主導した独自調査によって、日本と同じく実は小麦が非常に汚染されているということが判明しました。当時の新聞には、多くの市民から寄せられた不安の声が掲載されています。それに対しヴィッシャーは、「世界中の人々が憤慨して当然なことは、実際の情報がないにもかかわらず安心させるような声明が平然となされていることである」と述べています。

このような地域からの異議申し立ては、実は中心、つまりアメリカ政府自体にも衝撃を与えました。当時のアイゼンハワー政権内では既に核実験政策の見直しさまざまな理由から進んでいましたが、小麦の汚染はその転換を促す大きな要因ともなりました。

アイゼンハワー大統領は、小麦の報道がなされた直後の安全保障会議の席上でこう述べています。「今あるすべての証拠は核実験が悪いことを示している。わが国のある地域のある食物においてはストロンチウム 90 が許容限界に近づいている。われわれは大気圏内では、もはや核兵器を実験しないだろう」と述べました。さらに小麦の汚染の政策的な影響は核戦略そのものにも及びました。アイゼンハワー政権内では全面核戦争も辞さないという先ほど紹介した戦略の是非を巡って議論が続いていましたが、核使用ではなく核抑止こそが平和を維持する唯一の手段だとアイゼンハワーは考えていました。小麦の汚染は、その彼の確信を決定的に強めるきっかけとなりました。別の会合でも彼は、「核兵器による大量攻撃による放射能のレベルは、たった数回の核実験の結果、ミネソタ産の小麦に起きていることに比べて途方もなく大きい。核戦争が起こり得ると想定するのはまったく難しい」と述べています。もともと全面核戦争に備えるために始められた地球規模の放射能汚染調査は、日本やミネソタといった地域における独自調査によってその妥当性や信頼性が揺らぎ、結果として全面戦争を想定するアメリカの核戦略自体を揺るがしたのでした。

## 5. おわりに

最後に結論に入りたいと思いますが、人類の時代に果たして地域はあるかという最初に挙げた点については、私は確かにあると思います。それは今回のグローバル・フォールアウトの例に限らずほかの例でもそうですが、人類の地球改変に伴うリスクの分布というのは空間的に非常に不均等であるからです。たとえばストロンチウム 90 はアマゾン上流、日本、ミネソタといったような地域に特に濃く出てくるわけです。実は北極圏にかなり出るという点も後に明らかとなります。このように一口に地球規模のリスクと言っても、その中に空間的差異というのがあるわけですが、果たしてその空間的差異によって地域が新しく生まれたのか、つまり全く新しい地域なのか、という問題があると思います。

リスク社会論を唱えた社会学者のウルリッヒ・ベックは、もはや従来の伝統や地域は地球規模のリスクの前では意味がない、それを超えて今はリスク共同体こそが地域の単位なのだ、と述べました。しかし、今回紹介した日本やミネソタ等の例に見られるように、地球規模のリスクの空間的差異は確かにありますが、それと伝統的な地域的差異——例えば、歴史的・

地理的差異、もしくは文化的・経済的差異などさまざまな差異があると思います——が交差することにより、人類の時代において異議申し立てを行う主体としてのハイブリッドな地域が生まれていると思います。地球環境問題を理解するためには、地球を一つと捉える見方から一歩進んで、このようなハイブリッドな地域の存在に注目し、地球規模のリスクの地理的分布がどのようになっているのか、その不均等性が伝統的な地域とどのように重なっているのか、そしてそのような地域が自ら直面するリスクを自ら認識し、それに異議申し立てができるのか、といった視点に立つことが私は重要だと思います。そういう意味で、地球規模のリスクを解決する鍵というのは、むしろせめぎあう眼差しがなければいけない、というのが私の結論です。



# ドヴォルジャークの「辺境」と チェコから見た「新世界」

福田 宏

愛知教育大学・地域社会システム講座・講師

## 1. はじめに

この報告では、ドヴォルジャーク (Antonín Dvořák, 1841-1904) というチェコの作曲家を素材として、中心と周辺、その狭間という三つの関係について考えていきたいと思います。ドヴォルジャークは——あるいはドヴォルザークと言った方が馴染みがあるかもしれません——日本でも比較的良く知られているクラシック音楽の作曲家ですね。樋口さんの報告では核兵器という究極の兵器が扱われていましたが、音楽のような文化もまた、力関係を示すものとして機能しています。むしろ文化によって特定の国や民族のアイデンティティーが示され、他の国や民族に対して優位に立とうとする傾向が世界のどこにおいても見られますので、文化の政治性についても注意深く見る必要があります。

では、チェコの場合はどうか。この地域は、大きな括りで考えれば、東欧とか中欧とか、あるいは中央ヨーロッパと呼ばれることもあります。いずれにしても西欧の視点から見れば、中心から少し離れた地域、率直な言い方をすれば「田舎」や「辺境」などと言われかねない場所です。19世紀後半には他の地域と同様チェコでもナショナリズムが強まりますが、そうした中で、チェコ人にも誇るべき歴史と文化が存在する、あるいは、存在するはずだという議論が高まっていきます。チェコ人の歴史が新たに編纂され、近代的言語としてのチェコ語が整備され、チェコ文学が生まれ、チェコのオペラが創作され、そのオペラを上演するための国民劇場が建設される。そういった文化の発展は、当時のチェコ人にとって極めて重要な政治的課題でもありました。ドヴォルジャーク自身は政治的な人間ではなかったようですが、彼が優れた作品を生み出し、国際的に知られる作曲家になったことは、チェコの人々にとっても大いなる自信につながったのではないかと思います。

しかしながら、「後発」地域がいくら頑張っても追いつこうとしても、それをもって「先進」地域と同一視されるようになるわけではありません。中心でも

なければ周辺でもなく、その狭間。これが私の報告でのポイントです。狭間というポジションは、実は日本についても言えるかと思えます。19世紀後半に「遅れて」近代化を始めた日本においても、西洋に追いつけ追い越せということで頑張ってきたわけですが、だからといって西洋と一体化したわけではありません。西洋に対するコンプレックスを持ちつつ、それと同時に、近隣のアジア諸国を上から目線で見てしまうという態度は、正に狭間という位置づけを反映していると言えるでしょう。現在のチェコについても、自分たちはヨーロッパであるという自負心のようなものが見られますが、他方では、自国に働きに来ているウクライナ人労働者に対して非常に強い差別意識を持っていたりします。

ここまでの、中心＝狭間＝周辺の三者関係についての説明ですが、ドヴォルジャークが興味深いのは、彼がアメリカに渡って別の三者関係にも関与したという点です。そちらについて簡単に説明したいと思います。

樋口さんの報告で取り上げられた20世紀後半のアメリカは、言うまでもなく超大国としてのアメリカでしたが、ドヴォルジャークが活躍していた頃、つまり19世紀末頃のアメリカはそうではありませんでした。当時のアメリカは政治的にも経済的にも急速に発展していたのですが、それでも、ヨーロッパに対して多かれ少なかれコンプレックスを抱えている状態でした。アメリカにおいて元々主導権を持っていたのは、ワスプ (WASP)、つまり白人 (ホワイト)・アングロサクソン・プロテスタントの人々 (主として男性) ですが、彼らは、中心としてのヨーロッパに対して対抗意識を持つと同時に、中・東欧やロシアからの移民、あるいは非白人のアジア系移民を見下すような態度を取っていました。そして、力関係の最下層に位置づけられていたのは、先住民と黒人、当時の差別的用語で言えば、インディアンとニグロということになります。こうした世界に、ドヴォルジャークが音楽の指導者として招かれるわけですね。ヨーロッパの物真似ではないアメリカ独自の音楽を創り出すために、なぜかチェコ人の作曲家に白羽の

矢が立てられたわけですが、それによってアメリカにおける中心=狭間=周辺の三者関係が微妙に揺さぶられることとなります(図1参照)。以下、この揺らぎについて詳しく見ていくことにしましょう。

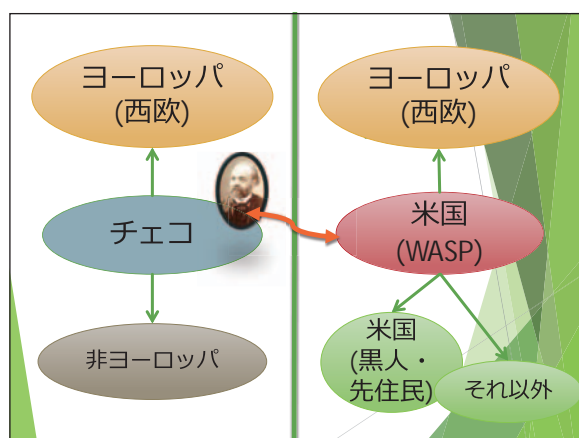


図1 チェコおよびアメリカにおける中心=狭間=周辺の三者関係とドヴォジャーク

## 2. チェコの「辺境性」とドヴォジャーク

最初に、チェコの「辺境性」について考えてみたいと思います。日本語でもボヘミアンという言葉を使いますが、この単語には、自由気ままに生きる奔放な人といった意味合いがあります。ボヘミアという言葉自体は元々チェコの西部を指す地理的な用語ですが、この言葉に、どこか遠くの土地といったニュアンスが加わり、ボヘミアン=自由人という図式ができあがったようです。そうした言葉のイメージを広めるうえで大きな役割を果たしたのが、19世紀末に書かれ、大ヒットしたプッチーニのオペラ《ラ・ボエーム》(ボエームはボヘミアンの伝説)だと言えます。この時期には、チェコやチェコ人を意味する単語としてもボヘミアやボヘミアンという言葉が使われていますが、自由人という意味が被さったまま無頓着に用いられたと思われます。要するに、一般のイギリス人やフランス人はチェコのことを良く分かっていなかったのでしょう。チェコ出身のドヴォジャークもまた、ボヘミアン、つまり未知の場所から出てきた作曲家という捉えられ方をすることになります。

肉屋の貧しい家庭に生まれ、そこから才能を見出されたドヴォジャークですが、国内外で広く知られるようになったきっかけは、ピアノ連弾曲の《スラヴ舞曲集》(第一集・1878年)でした。当時のチェコは独立した国家ではなく、ハプスブルク帝国という大きな国のなかの一地域でしたが、その範囲を越え

て知られるようになったということですね。

この時の成功の鍵は、ピアノ連弾用の作品だったという点にあります。当時はピアノが工場で生産され始める時期に当たっており、経済的に力を持ち始めていた新興市民層がそれを購入し、彼らの娘たちがそれを弾く、という構図ができつつありました。元来、楽器は職人が一台ずつ手作りで製作するものであったものが、重厚な音が求められる中でピアノそのものが大型化し、弦を張る枠には10トンを遥かに越える力がかかるようになります。そうすると、もはや木の枠組では対応できないので、産業革命を象徴する素材、つまり鉄の枠が使われ始めました。従来の楽器から見れば正に化け物のような存在です。それが大量に生産され、購入され、演奏されるようになる。新興市民層たちは、自らの教養とステータスを見せびらかす一種のツールとしてピアノを買い、それを娘たちに習わせるようになりました。この点は、高度成長期の日本において、多くの家庭でピアノが買われるようになった現象とちょっと似たところがあります。

では、ピアノを習い始めた「良家」の娘たちは何を弾くのか? 家庭で求められたのは、ベートーヴェンに代表されるような「正統派」で「硬派」な音楽というよりは、もう少し気軽に弾けて楽しめるような音楽だったと言えます。そうした中で、ドヴォジャークの《スラヴ舞曲集》は打ってつけの作品でした。より正確に言えば、《スラヴ舞曲集》は最初から新興市民層の家庭をターゲットとして生み出された企画商品だったということになります。ブラームスの《ハンガリー舞曲集》のヒットで気を良くしていた楽譜出版社が、当時売り出し中であったドヴォジャークに声をかけて書かせたというのが実際のところでした。ハンガリー風とかスラヴ風とかいったエキゾチックな要素も、売れるポイントであったと言えるでしょう。当時のヨーロッパでは、新興市民層を核とする音楽の市場が成立しつつあったと言えますが、抜群のメロディー・メーカーであったドヴォジャークは、そこにピッタリはまったということになります。

これを機にドヴォジャークは多くの楽譜出版社から声をかけられるようになりました。出版社の中には、より大きなマーケットを相手にできるよう、チェコ語の歌だけでなくドイツ語の歌にも曲を書くようリクエストをするところもありました。チェコの「狭い」地域に閉じこもるのではなく世界で通用する作曲家になって欲しいという「親心」が働いていたのかもしれない。楽譜が出版される際には、多くの場合、チェコ語ではなくドイツ語のタイトルが付け

られ、ドヴォジャーク本人の綴りについても、チェコ語特有の記号が省略されたりしました (Dvořák ではなく Dvorak)。ところが、これが彼にとっては大きな苦痛の種となったようです。急に外国でチャホヤされ始めたドヴォジャークに対し、民族の裏切り者といった誹謗がなされるようになったからです。チェコ人にもかかわらず、ドイツの出版社からドイツ語のタイトルで楽譜を出し、しかも、名前もドイツ風にしてしまっていると言われては、ドヴォジャークもたまったものではありません。彼は楽譜出版社に対してチェコ語での表記を再三にわたって要求したようですが、その背景には、チェコ人としての彼自身のプライドだけでなく、自らの保身のためという側面もあったのではないかと思います。ちなみに、彼のファースト・ネームはアントニン (Antonín) ですが、ドイツ語ではアントン (Anton) となります。出版社がチェコ語表記を認めなかったケースでは、ドヴォジャークは省略形の Ant. で妥協することもあったようです。Ant. であれば、チェコ語かドイツ語かという点は問題にならなかったためです。

### 3. 音楽の「進化」と「退化」

ともあれ、国際的に知られるようになったドヴォジャークは、イギリスにもしばしば呼ばれるようになり、1891年にはケンブリッジ大学から名誉博士号を授与されてもいます。ラテン語で書かれた受賞理由には以下のような記述が見られます。

人里離れたボヘミアの片田舎に生をうけ、困難と障害を乗り越え高みに至りしそなたは、自らの非凡な才能により、生地の音楽芸術に特有なものすべてを生かしつつ、祖国の名声を輝かしきものとした<sup>1</sup>。

「人里離れた片田舎」という日本語は意識しすぎかもしれませんが、いずれにせよ、ケンブリッジ大学の視点から見れば、ボヘミアが辺境の地であったことは確かなようです。そのような場所に生まれたにもかかわらず、よく頑張りました！それが博士号授与の決め手となったわけですが、これは「上から目線」の褒め方であり、失礼な言い方のようにも思えます。しかしながら、そうした差別的な眼差しはケンブリッジ大学だけではありませんでした。ドヴォジャークの良き理解者であったはずのドイツ人指揮

者、ハンス・フォン・ビューロー (Hans von Bülow, 1830-1894) ですら、陰では彼のことをキャリバン、つまりシェークスピアの《テンペスト》に登場する野蛮人に喩えていたとされています。後に、ドヴォジャークがアメリカに行った際には、オールド・ボラックス (old borax)、すなわち「古びた安物の家具」といった渾名まで付けられていたようです。先ほど申し上げたように彼の名前にはチェコ語特有の記号 (Dvořák) が付いていますが、英語圏ではその記号が省略されてドヴォラックなどと発音されます。オールド・ボラックスという渾名は、そこから来ているのでしょうか。

こうした差別的視点を肖像画からも考えてみたいと思います。図2は有名なベートーヴェン (1770-1827) の肖像画ですね。小学校や中学校の音楽室でご覧になっていた方も多いと思います。ベートーヴェンはクラシック音楽を代表する作曲家と位置づけられ、日本でも「楽聖」という言葉で半ば神格化された感のある人物ですが、シュティイーラーが描いた肖像画は、正にそうしたイメージを体現しているように見えます。聴力を失ったにもかかわらず、自らの信念を貫き通し、音楽の理想を追求し続けた偉人、あるいは、「鳴り響く哲学 (= 音楽)」をもって近代的市民社会の幕開けを告げた大作曲家など、最大級の賛辞がベートーヴェンに寄せられてきました。音楽に「意志の力」や「理想」を持ち込んだ人物と評した政治思想史の泰斗、丸山眞男 (1914-1996) もまた、シュティイーラー的人物像を継承した知識人の一人であったと言えます。

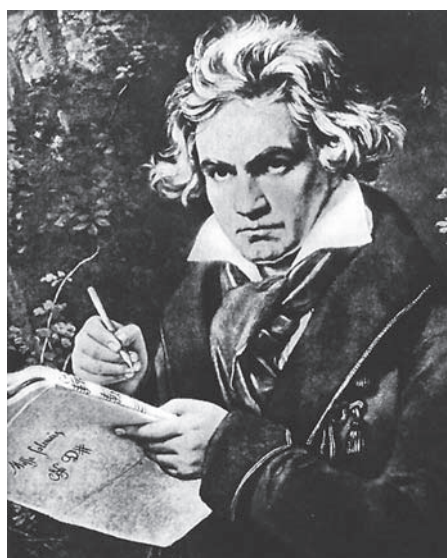


図2 「楽聖」ベートーヴェンの肖像 (1819年頃) ヨーゼフ・カール・シュティイーラー画

出典：ロベール・ポリエ編、武川寛海訳『目でみるドキュメント ベートーヴェン』音楽之友社、1970年、165頁。

1 カレル・V. ブリアン、関根日出男訳『ドヴォルジャークの生涯』新時代社、1983年、288頁。ただし、一部改訳。ラテン語原文およびチェコ語訳は以下に掲載されている。Antonín Dvořák, *Korespondence a dokumenty: kritické vydání*, vol. 9 (Praha: Editio Bärenreiter, 2004), pp. 258-260.



図3 シカゴ万博(1893年)で指揮するドヴォジャーク  
出典: Jarmil Burghauser, *Antonín Dvořák* (Praha: KLP, 2006), p. 89.



図4 アメリカの雑誌『センチュリー・マガジン』(1892年)に掲載されたドヴォジャークの肖像画  
出典: Michael B. Beckerman, *New Worlds of Dvořák: Searching in America for the Composer's Inner Life* (New York: W. W. Norton & Company, 2003), n.p.

これに対し、図3・図4のドヴォジャークはどうか。こちらの二つの絵では、「楽聖」とは言い難い、どちらかと言えば庶民的な存在として描かれていると言えないでしょうか。どちらもアメリカで出されたものですが、マエストロ(巨匠)というよりは居酒屋でビールを飲んでいるおっちゃんという雰囲気が出ています(実際のところドヴォジャークはビール好きだったようですが)。もちろん、ここで注意しなければならないのは、現実のベートーヴェンやドヴォジャークがイケメンであったかどうかという話ではありません。実際の本人たちが美男か醜男かといった点も興味深い論点ではありますが、言葉や画像により、時として実物とはかけ離れたイメージが創り上げられていくこともある。そこが重要な点だと言えます。

こうしたベートーヴェンとドヴォジャークの対比について、アカデミックな観点から考察する試みも現れます。この当時、音楽人類学という新しい学問分野が登場してきますが、その第一人者であり、チェコ出身でもあるヴァラシェク(Richard Wallaschek, 1860-1917)という研究者が、音楽における人類の発展について述べています。彼は、未開人種が文明化された諸民族と同等の音楽を有していないのは能力の問題ではないと主張しました。野蛮人であっても頑張ればできるのだ、という話です。未開人種もまた、教育によって進歩を加速させ、高次元の芸術を獲得させることが可能である。文明化の過程で原始舞踊を民族舞踊へと高め、チェコ人・ポーランド人・ハンガリー人といった発展途上の諸民族がそうであったように、その民族舞踊を真の普遍芸術へと昇華できるはずだ。このように説明したわけですね。その意味において、ドヴォジャークは、辺境民族の文明化を音楽の面から実現した功労者ということになります。

しかしながら、「よく頑張りました」とドヴォジャークを褒め称えること自体は良いのですが、それはやはり、「上から目線」での褒め言葉に過ぎません。その眼差しの背景には、ベートーヴェンを頂点とする音楽進化の体系が想定されていて、そこからすれば、ドヴォジャークは発展途上であり、結局のところワンランク下の音楽家に位置づけられてしまう。ドヴォジャークの音楽は、確かに聴きやすく分かりやすい。新興市民層たちも、ベートーヴェンの真面目で小難しい音楽よりはドヴォジャークのメロディーに惹かれてしまう。ただ、いわゆる良識派の市民たちは、これは本当に芸術なのか、といった疑いの眼を向けるわけです。ドヴォジャークなんていうのは、単に民謡を集めてきてくっつけただけではないか。チェコの物珍しい音楽だということで売り出しているけども、発展性も何もない娯楽作品に過ぎないのではないか。つまり、ドヴォジャークの作品は、至高の芸術を退化させる、あるいは退廃させるものではないか、という反論が出てきてしまうのです。

今日の報告で詳しく説明することはできませんが、こうした音楽の進歩史観は1960年代ぐらいまで続いたのではないかと思います。日本の芸術評論において多大な功績のあった吉田秀和氏(1913-2012)ですが、1961年に単行本として出した『名曲三〇〇選』では、ドヴォジャークの新世界交響曲を「通俗名曲の十八番の一つ」とし、「安っぽい効果をねらいすぎている」と評しています<sup>2</sup>。また、チャイコフスキーに

2 吉田秀和『名曲三〇〇選』ちくま文庫、2009年、267-8、276頁。



ついでの評価も散々なもので、「私自身は、今後チャイコフスキーを一生かかなくとも、あんまり困ることもないだろう」と書いています。普通のクラシック・ファンの間では、今でもドヴォジャークをバカにするところがあって、私自身も学生時代にはドヴォジャークのことを野暮ったいなどと偉そうなことを言っておりました。若気の至りですね。ドヴォジャークさん、ごめんなさい。この場をお借りして謝っておきたいと思います。

#### 4. 「新世界」におけるドヴォジャーク

さて、そのドヴォジャークがアメリカに行くかどうか、という点に移りたいと思います。19世紀末のアメリカ、特にニューヨークでは、今の東京のように外国から一流の音楽家が次々とやってきてコンサートをするという状況が生まれていました。いわば一大文化都市へと成長していたわけですが、ではアメリカ独自の音楽はあるのかということではない。そこで自分たちの音楽を創ろうということになるのですが、先進的な音楽にしようとする手下をするとドイツ音楽のコピーになりかねない。ニューヨークのナショナル音楽院——といっても国立ではなく私立の音楽院——では、ドイツ音楽とは異なる何かオリジナルのものが必須だという議論が行われ、結果として、ドヴォジャークに白羽の矢が立てられました。当時のチェコは独立国でもなかったのですが、アメリカからすれば、自らの音楽を樹立したという点で先輩格と見られたわけですね。ともあれ、ナショナリズム音楽院の院長に就任したドヴォジャークは、1892年にニューヨークに到着し、7ヵ月ほどで交響曲第九番《新世界より》を完成させます。初演は大成功だったと言われています。その他にも、僅か数年の滞在期間だったにもかかわらずチェロ協奏曲や弦楽四重奏第十二番《アメリカ》といった傑作を書いていますので、ドヴォジャークのアメリカ滞在は実り多きものだったと言えるでしょう。

ところが、ドヴォジャークとその作品がきっかけとなって、アメリカ音楽とは何かという論争がわき起こります。彼の新世界交響曲は、アメリカ音楽にとっての指針を示したもののなのか、やっぱりチェコ人が書いたからチェコの音楽に過ぎないのか。しかも彼自身が、アメリカには自分たちの音楽がちゃんとあるじゃないかと発言して物議を醸します。つまり、先住民や黒人の豊かな音楽こそがアメリカの文化であると主張して、多くの人の反発を呼ぶわけです。最初に申し上げたように、アメリカは白人中心

の社会でしたから——はるかにマシになったとはいえ今も多分にそうですが——、先住民や黒人は文明の外に置かれた存在でした。当時の主流である WASP からすれば、インディアンやニグロ——差別的な表現ですみません——の音楽でアメリカ文化を代表することなど有り得ないという話ですね。ドヴォジャーク本人は、公の場で積極的に主張する人間ではなかったようですが、ジャーナリストたちは、「アメリカ人はインディアンとニグロの音楽を使うべき」といったセンセーショナルな見出しを付け、ずいぶんと大袈裟な書き方をしたようです。ドヴォジャークを招聘した当のナショナル音楽院もまた、世間の注目を集めるために、そうした動きを黙認していた節があります。

当然、こうした論争はヨーロッパにも伝わりました。ドイツやオーストリア（ハプスブルク帝国）では、ドヴォジャークのような、あんな田舎者がアメリカくんだりまで行って何を言っているのか。そんな批判が出たりもするわけですね。ドヴォジャークにとっては良い迷惑だったと思いますが、チェコ人の彼がアメリカに行き、アメリカ文化に一石を投じることによって様々な波紋が広がっていたことが、こうした点から伺えます。

次に、新世界交響曲を実際に聴いていただいて、どの部分にアメリカ的な要素が見られるかについて考えてみたいと思います<sup>3</sup>。例えば、日本でも《家路》のタイトルで知られている第二楽章の旋律を取り上げてみましょう。子供の帰宅を促すために多くの自治体で夕方5時に流されていますので、それをご記憶の方が多いかもしれません。

このメロディーについては、黒人霊歌の《スティール・アウェイ》との類似が指摘されています。ドヴォジャークは、ニューヨークのナショナル音楽院での教え子であったバーレー（Henry Thacker Burleigh, 1866-1949）から多くの黒人霊歌を教わったようですが、彼の声質はイングリッシュ・ホルンに似ていたとも言われています。彼が歌う《スティール・アウェイ》を聴き、ドヴォジャークがイングリッシュ・ホルンを第二楽章のソロ楽器として用いたというのは、十分予想されるシナリオです。

アメリカの音楽学者ベッカーマンは、その他にも、引用と思われる事例を数多く検討していますが、言うまでもなく、それをもって単純に剽窃とか盗用と決めつける必要はないでしょう。ベッカーマンが自分自身の体験として紹介している点ですが、既存の

3 報告では、ベッカーマンの著書（附属CD）に収められたサンプル音源を使用した。Beckerman, *op. cit.*, pp. 125-137 & CD track nos. 31-36.

ポピュラー音楽を何時間も演奏して楽しんだ日の翌日、気の向くままにピアノに向かい、前日の余韻を感じながら即興で演奏を始めたそうです。そこで生み出された曲は、ベッカーマンのオリジナル音楽ではあるのですが、厳格な研究者が分析すれば、そこかしこに既存作品の断片を見つけ出すことができるでしょう。ドヴォジャークも恐らくそのような感覚で作品を書いていたと思われます。何と言っても彼は屈指のメロディー・メーカーですから、聞き取った曲をちまちまと引用したり、ましてや盗んだりする必要はなかったはずです。彼はアメリカという新天地で見知らぬ音楽に接し、そこから新たなインスピレーションを獲得していったのではないのでしょうか。そこから生み出された音楽が、果たしてアメリカ的なのか、チェコ的なのか、はたまた盗用なのかといった議論は、あまり意味がないのかもしれない。

ドヴォジャークの作品に影響を与えたというパーレーの主張についても、少し慎重に検討する必要があります。パーレーが黒人音楽を歌って聴かせたというのは間違いないと思われますが、パーレーがそのことを強く言い始めたのは、ドヴォジャークが亡くなってから随分と経ってからの話です。パーレーが指摘する新世界交響曲と黒人霊歌《スウィング・ロウ》の類似点についても、パーレー本人のアレンジ自体が新世界交響曲からの逆引用と思われる側面もあり、彼の主張には疑わしい点が見られます。

このように考えていくと、音楽の本質はそもそも何かという根本的な疑問に行き着いてしまうのかもしれない。話が飛ぶかもしれませんが、今回の報告を準備していた時、私は「偽ベートーヴェン」騒動のことを思い出しました。聴覚障害を抱えながらも交響曲《HIROSHIMA》などの大作を発表し、クラシックの現代作品としては異例のヒットを生み出した佐村河内氏のことです。私たちの多くが、作曲家の苦難に満ちた人生に涙し、名だたる専門家が書いた解説文を読みつつ、70分を越える長大な《HIROSHIMA》に感動してしまったわけです。騙した方が悪いとか、騙された方が悪いとか、色々議論はありますが、ここではそれは問いません。音楽が全くの無色透明ということはありませんが、説明の仕方によって、あるいは置かれたコンテキストによって、同じ楽曲が様々な色を帯びるということ。この点が非常に大事なことであり、芸術作品を素材として扱う際に注意すべきことだと思います。

## 5. おわりに

時間ですので、そろそろ話をまとめましょう。私の報告では、ドヴォジャークを素材として二重の三者関係を見てきました。二重というのは、ヨーロッパとチェコとその他、ヨーロッパとアメリカと先住民・黒人、という二つの三者関係ですが、その両方にドヴォジャークが絡んだということですね。中心と周辺の間というポジション——ケンブリッジ大学の表現を借りれば「人里離れた片田舎」——に生まれたにもかかわらず、ドヴォジャークは国内外で認められる作曲家になりました。努力と才能はもちろんですが、当時成立しつつあった音楽市場に彼がうまく乗ったという点は非常に大きいと思います。《スラヴ舞曲集》の楽譜がヒットすることによってドヴォジャークは広く知られるようになり、イギリスに呼ばれ、ついにはニューヨークのナショナル音楽院の院長として、アメリカ音楽界の期待を背負うことにもなりました。ドヴォジャークより17歳年長のスメタナは、「国民楽派」としての活動が基本的にチェコ地域に限定されていましたが、ドヴォジャークは、良くも悪くもマーケットの力を得て軽々と国境を越えてしまったわけです。

しかしながら、売ってしまったことが逆に、ドヴォジャークには重荷となっていたのかもしれない。《スラヴ舞曲》のようなエキゾチックな作品を書いている限りは、「ご当地作曲家」として歓迎されるし作品も売れる。ただ、ドイツ音楽を頂点とするヒエラルヒーの中では、どうしても一段劣った存在として見られてしまう。ドヴォジャークには彼なりの理想が他にも色々あったのではないかと思います。それを前面に出してしまうと「ドイツかぶれ」とか「ヴァーグナーの亜流」といった批判を受けたりする。結局のところ、ドヴォジャークは自らの「商品価値」を維持するために、特定の枠にはまった作品を書き続けることになったとも考えられます。そのことに対して、彼本人がどこまで自覚的であったかどうかは分かりませんが、少なくとも様々なストレスを抱え込んでいた点は事実のようです。

あまり知られていない話ですが、例えば、アメリカ滞在中のドヴォジャークが極度の神経症に陥り、一人で街を歩けない状態になったという証言が残っています。一説によれば、ニューヨークの喧噪を恐れていた彼は、行き交う車両だけでなく市電の電線まで嫌がっていたようです。一般的な伝記においては、ドヴォジャークが強度のホームシックにかかっていたと説明されることが多いのですが、渡米の3

年前より単独で出歩けなくなっていたという説もあり、精神的に何らかの問題を抱えていた可能性は否定できません。研究者によっては、広場恐怖症やパニック障害の症状と考える人もいます。ドヴォジャークの場合、家族を大事にする人であったことや、鉄道オタクやハト好きの一面など、ほのぼのとした人柄を感じさせる面が良く紹介されますが、そこからは想像できない苦悩のようなものが彼の人生にはあったのかもしれない。

残念ながら、ドヴォジャークが実際に精神疾患を患っていたかどうかについて現時点での史料状況からは証明できないですし、仮にそうであったとしても、その原因を今日の報告で申し上げた点から説明できるかどうかは何ともいえません。結局のところ、彼の内面にこれ以上立ち入ることはできないのですが、親しみやすいドヴォジャークの音楽の中に、中心と周辺と狭間という三者のせめぎあいが入り包まれていた（かもしれない）。その点を指摘することで、私の報告を終わりたいと思います。

### 参考文献

- 福田宏「進化と退化のはざままで：ドヴォルザークの『親しみやすさ』と苦悩』『フィルハーモニー』（NHK交響楽団機関誌）82巻5号、2010年、40-45頁。
- 福田宏「ロシアとヨーロッパ：狭間の地域研究」『地域研究』16巻1号、2015年、8-15頁。
- 福田宏、池田あいの編『国民音楽の比較研究に向けて：音楽から地域を読み解く試み』（CIAS Discussion Paper, No. 49）京都大学地域研究統合情報センター、2015年。<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp49.pdf>
- その他、ドヴォジャークに関する参考文献については、<http://www.hfukuda.info/dvorak.htm> を参照。

[付記] 本報告は、科研費・基盤研究（B）課題番号25284149（代表・橋本伸也、2013-15年度）、同基盤（B）課題番号25283001（代表・越野剛、2013-16年度）、同基盤（C）課題番号25380184（代表・東原正明、2013-15年度）、同基盤（C）課題番号15K03316（代表・福田宏、2015-17年度）等の成果の一部である。



# ゴリラから読み解くカメルーン

## ——狩猟と農耕の相関性——

大石 高典

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・特任講師

### 1. はじめに

ここでは、中部アフリカ・カメルーンにおける狩猟と農耕の相関性をテーマに話をいたします。写真1は、コンゴ川の支流のジャー川でバクウェレという農耕民の漁撈活動について現地調査を行っている際に、たまたま撮れた貴重なものです。ニシローランドゴリラ<sup>1</sup>は木登りを比較的好むようですが、おそらく樹上から川に落ちてしまい、溺れて死んだゴリラがぷかぷかとキャンプの前を流れてきたので、バクウェレの青年が、それを拾い上げてまじまじとみつめているという状況です。まるで日本の昔話の「桃太郎」を思い出させるような情景ですが、カメルーン東南部の地域住民にとって、ゴリラは比較的に出会うことの多い動物です。本日の他の報告は、いずれも国家を越えたマクロな地理的スケールで地域をとらえ、その間の「眼差しのせめぎあい」をあつかっていますが、私はずっとミクロなスケールに降りていって、民族集団どうしの関係性といったものに焦点を当てたときに見えてくるような「眼差しのせめぎあい」について考えてみたいと思います。地域や集団のあいだで見られる「眼差しのせめぎあい」は、



写真1 流れてきたゴリラとにらめっこする青年

否定的にとらえられがちに思えますが、なにかしらポジティブな面もあるのではないかと、事例報告を通じて、そのような側面に光を当ててみたいと思っています。

具体的に取り上げるのは、カメルーン東南部の多民族社会で、話の主演となるのは、熱帯森林に共に住んでいる狩猟採集民、農耕民、そしてゴリラの三者になります。彼らは生活様式であるとか、それぞれが作っている社会のあり方であるとか、社会規範は異なっていますが、森というハビタット（居住環境）に強く依存しているという点において共通しています。ゴリラに注目する理由は、バカ・ピグミーやバクウェレにとって、ゴリラが単なる動物にとどまらず、両者に対して非常に強いエージェンシー（行為主体性）を持って働きかける、社会関係の網目のような存在だからです。今日は、人／人、人／動物の境界がいかにか混じり合いながら、「眼差しのせめぎあい」が起こっているのかについて、人間でもゴリラでもない、「人間＝ゴリラ」というハイブリッドを手掛かりに考えてみたいと思います。

狩猟採集民と農耕民の関係は、非常に時間スケールの長い人類史上のテーマです。生業として狩猟採集をおこなう狩猟採集民はずっと減り続けていて、農耕が始まって1万年時点では人口の100%は狩猟採

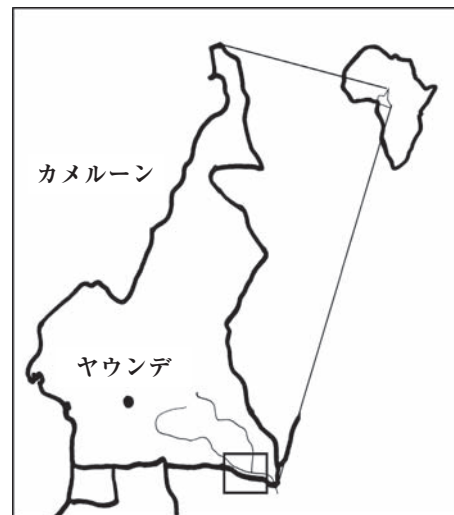


図1 カメルーン東南部（調査地域）

1 本稿では、以下、ゴリラと呼ぶこととする。

集民だったのですけれども、西暦 1500 年には人口の 1% になって、産業革命が終わった時点ではわずかに 0.001% になっていたという具合です（図 2 参照）。現代まで生きのびた狩猟採集民集団は、アフリカを含む熱帯地域と北米西海岸などの極北地域を中心に残っています。このように現在、狩猟採集をおもな生業としている人々は、ほとんど残っていないわけですが、多くの場合その理由は狩猟採集民の人口が減って消滅したか、近隣の非狩猟採集民に吸収されてしまったというふうに考えられています。

しかし現在でも、中部アフリカのコンゴ盆地を中心とする熱帯雨林には、ピグミーという人口 40 万人規模にもおよぶ狩猟採集民集団がまとまった形で残っています。彼らは周囲の民族集団と共存しつつも、それらに同化することなくアイデンティティを保ったまま今日に至っています。この「分離的共存」という興味深い事態は、いったいどのようにして成り立ってきたのか。これを、「せめぎあう眼差し」から読み解くことが今日の発表内容になります。

これまでも、同じ環境に住まいながらも生業に根差した分業を実現しているメカニズムを説明するモデルとして、アフリカの事例では、たとえばギャラティという研究者は、「排除による統合 (Synthesis through exclusion)」というモデルを提唱しています (Galaty 1986)。これは、ケニアの狩猟採集民ドロボーと牧畜民マサイが、分業により環境を使い分けて相互に補い合いながら、政治的には相互に排除し合いつつも社会的には統合を実現しているというものです。生業に根差したアイデンティティをもとに、相互に排除しあうという関係ではあるわけですが、一

方が一方を包摂し同化してしまう、あるいは排除により阻害しあうというわけでもないやり方はないのでしょうか。排除によらず、親密な関係を維持したまま分離的共存が見られる事例として、アフリカ熱帯森林地帯の狩猟採集民と農耕民の関係は多くの研究者の注目を集めてきました。そこで、当初行われた欧米研究者による文化人類学的な研究では、両者の関係の対立的、あるいは敵対的な側面が目されました。

しかし、日本人研究者による生態人類学的な研究が 1960 年代の後半から行われた結果、むしろ生態経済的な面に着目すると、農耕民と狩猟採集民の間には炭水化物とタンパク質の物々交換に基づいた、共生的な関係が成り立っているということが指摘されてきました。コンゴの農耕民レッセとエフェ・ピグミーの関係について調べた寺嶋秀明は、それが単に生態学的な生存可能性を高めるだけではない、と指摘しました (寺嶋 1991)。寺嶋は、狩猟採集民と農耕民の出会いが、生きる世界を森林と定住村落とに分断し、互いに隔離する方向だけではなく、むしろ双方の世界を拡大し、相互に浸透させる方向にも進んできた、というふうに捉えます。

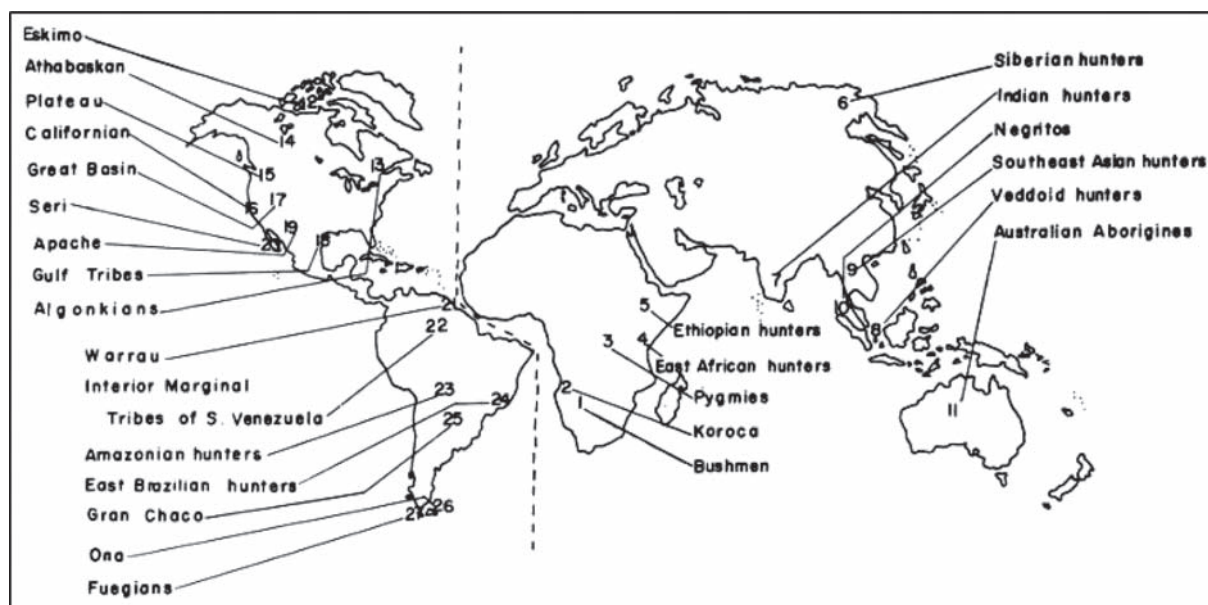


図 2 世界における狩猟採集民の分布  
出典：Devore and Lee (1968; 1999).

## 2. 狩猟採集民のバカ・ピグミーと農耕民のバクウェレ

それでは、この「生きる世界の拡大」という見方を、非人間的存在であるゴリラ、動物にまで広げて考えてみたらどうでしょうか。人間の居住環境という点から見ると、アフリカは大雑把にギニア湾沿岸を中心に発達した熱帯森林の湿潤地帯と、それを取り巻く乾燥地帯に分けられます。カメルーンはちょうどこの両方の境目に位置しています。気候としての分類というだけではなく、250以上の言語の話者を擁する多民族国家であるカメルーン社会は、いくつかの異なる相互作用、せめぎあいによって特徴づけられます。たとえば、イギリスとフランスによる分割統治の結果である英語圏とフランス語圏のせめぎあいであったり、北部のイスラム圏と南部のキリスト教圏の間のせめぎあいが挙げられます。いずれにせよ、カメルーン東南部の熱帯森林地域は、国家システムのなかでは最も辺境に位置づけられる地域の一つと言えるかと思います。そのカメルーン東南部の森は、広大な中部アフリカのコンゴ盆地に広がる熱帯雨林につながっております。

コンゴ盆地には約15のピグミー系狩猟採集民が居住していることが知られます。コンゴ盆地東部には、イトウリの森に住んでいるムブティであるとか、エフェ、トゥワという人たちがいますけれども、私の研究しているコンゴ盆地西部には、アカとバカという大きな集団や、さらに農耕化・定住化が進んだバボンゴやバコラという集団があります。彼らは非常に多様性に富んでいて、それぞれの集団は異なる言語を使っており、今日では狩猟採集のみならず、多様な生業活動——農耕や商業を取り入れている人たちもいる——で暮らしているのですけれども、生業面だけではなく、儀礼や精神活動においても熱帯雨林に深く依存しているという点において、共通した特徴を持っております。今日のお話の第一の主役であるバカ・ピグミーは、そういった狩猟採集民集団の一つです。総人口は3万人から4万人と推定されていて、ピグミー系狩猟採集民のなかでは比較的早くから定住化が進んだと言われていますが、モロンゴと呼ばれる数週間から数ヶ月に渡る長期狩猟採集行はいぜん残っています。

写真2は私の調査地のバカ・ピグミーの人々です。定住集落では自給農耕だけではなくて換金作物のカカオを栽培していますけれども、同時に例えばアフリカマンゴノキ (*Irvingia gabonensis*) のような栄養分に富んだ野生ナッツの採集のために年間数週間～数ヶ月に渡って森に入るといった活動もしています。

そういったときには、身近な木や葉でできたモングルと呼ばれる非常に移動に適した居住形態をとって、森のなかを移動しながら暮らします。



写真2 バカ・ピグミー

次に、今日のお話の第二の主役であるバクウェレという農耕民について紹介します。ここでは「農耕民」という言葉を民族集団としてのバクウェレという意味で使いたいと思います。彼らは比較的最近になってサバンナから熱帯雨林に入ってきたと言われるコンゴ盆地東部のバントゥー系農耕民に比べて、より長い期間、数百年に渡って熱帯雨林に住んできたと推定されています。彼らはバカ・ピグミーと隣接居住しながら物々交換をおこなうような関係を、少なくとも過去150年ほどにわたって続けてきたと考えられます。バカ・ピグミーとバクウェレの間には、正式な通婚関係はありません。しかしバクウェレ男性とバカ・ピグミー女性の間で子供ができるということはしばしばあって、そういう子供はバカ・ピグミーとして育てられることとなります。バクウェレは、農耕民といっても、狩猟採集を含む森の中での活動を活発に行いますが、特に河川漁撈を得意としていまして、乾季になると赤ん坊であるとか、おじいさん、おばあさんを含んだ世帯の構成メンバーのほとんどを加えて、さらにニワトリやヤギなどの家畜もいっしょに連れて漁撈に出かけます(写真3)。バクウェレもまた、そういうわけでバカ・ピグミーとは異なる形で森に深く関わる生活を送っている人

たちです。



写真3 漁撈キャンプに滞在中のバクウェレ

### 3. ゴリラを介した象徴実践

さて、バカ・ピグミーやバクウェレには、この地域に住んでいる、おおよそ60種類ぐらいの哺乳類が認知されていますが、ゴリラはその中でも独特な位置づけにある動物の一つです。ゴリラは、バカ語でエボボ (ebobo)、バクウェレ語ではジル (dzil) というふうに名付けられていますが、バカ・ピグミーは、バクウェレのことをゴリラに喩えます。また、バクウェレが亡くなると、ゴリラに生まれ変わると言います。バカ・ピグミーは、バクウェレとゴリラがいかに似ているかということをお話するとき、——非常にうれしがって話すのですが——頻りに身体的な特徴やしぐさに言及します。ゴリラとバクウェレに共通しているのは、バカ・ピグミーに対する「威張った」振る舞いであるとか身振り、興奮したときのうるささ、そして危険性です。まずバクウェレがふだんバカ・ピグミーを見下ろすようにする姿勢や、ふんぞり返った格好で偉そうに歩く歩き方がゴリラに似ていると言います。それはゴリラが威嚇するときに立ち上がってドラミングをしたりするときの格好にそっくりであると、そういうふうに言うわけです。

バカ語で動物を意味するソ (so) という言葉がありますが、それは同時に肉の意味も兼ねています。多様な哺乳類が狩猟対象とされ、そのほとんどの哺乳類が食用にされますが、ゴリラは決して積極的に食される動物ではありません。ゴリラに関する明確な食物禁忌はありませんが、特に女性に多いのですけれども、個人的な理由でゴリラを摂食回避する者が多くみられます。それはなぜかと聞きますと、ゴリラが農耕民に似ているからである、あるいは手があからだ、という理由が返ってきます。

例えばアフリカマルミゾウのような大型動物は、象牙のような非常に経済的価値が高い森林産物——当然現在は取引そのものが違法ですが——をもたらすのに対して、ゴリラはほとんど経済的価値がない動物です。それにもかかわらず、バカ・ピグミーはゴリラを非常に細かく観察して性別、成長段階、妊娠しているかどうか、など10の状態に分けて名付けています (表1参照)。ゴリラの遊動集団はブファ・エボボ、ゴリラの寝床がまとまって見られる場所は「ゴリラの村」(テ・エボボ)と呼ばれます。バカ・ピグミーにとって、最も重要な狩猟対象とされるアフリカマルミゾウに付けられている名称の数が、総称を含めて9~18種類であることを考えると、ゾウには及ばないものの、多数の名称がゴリラに与えられていることはバカ・ピグミーの人々のゴリラへの関心の強さを物語っていると言えるでしょう。

表1 バカ・ピグミーによるゴリラの民俗分類

番号	名称	説明
1	ebobo	ゴリラ (総称)
2	la ebobo	アカンボウ
3	libambi	コドモ
4	mokolo a ngille	ワカモノオス
5	bufo ngille	シルバー・バック
6	ndonga	ヒトリオス
7	nyagole	ムスメ
8	wose ngille	ワカモノメス
9	nyao	ハハオヤ
10	nyandaba	シルバー・バックと一緒に行動するメス

出典：大石 (2012)

ところで、バカ・ピグミーの間では「農耕民の本性がゴリラである」というイメージが、子供の間にさえも深く根付いている、ということに気づかされたことがあります。私は調査地に必ずスケッチブックを持って行くようにしています。大人も子供もみんな絵を描くことが好きなので、適当に渡して描いてもらっています。あるとき推定年齢10歳ほどのバカ・ピグミーの少年が、日暮れまでかかって描いてきた動物の絵を持ってきたのですけれども、彼の描いたものの中に、私にはどう見ても人間の子供にしか見えないものが描きこまれていたわけです (図3)。疑問に思った私は、その少年に「何を描いたの?」と尋ねたのですが、彼は何気なく「ゴリラだよ」と答えて、その後笑いながら農耕民一般に対する蔑称であるカカ (kaka) という言葉を付け加えたわけです。気が付くと、ほかの子供や大人の描いた絵のなかにも、動物なのか人間なのか見分けがつかないような





図3 バカ・ピグミーの少年による「人間ゴリラ」のイラスト

「ゴリラ」の絵が散見されることに気づきました。

この経験は私にとっては少なからずショックでしたけれども、このようにバカ・ピグミーにとっての「ゴリラ人間」としての農耕民というものは単なるイデオムというよりも、ずっと生々しく立ち現われているものなのだ、ということを感じ知らされたわけです。

それから、「人間ゴリラ」について、さまざまな語りがあることが分かったのですが、大きく分けて二つパターンがあるということが分かりました。一つは農耕民の妖術師がゴリラになって襲ってくるというパターンです。

【事例1：ゴリラに化ける妖術師】2009年10月のある早朝、Fが目覚めると、子供たちが家の前のサッカーボールのゴール代わりに立てていた棒の先に、一羽のフクロウが止まっていた。フクロウには、のどの部分に大きな目立つ突起があった。Fの近所に住む妖術師として有名な老女も、のどに大きな突起ができていますので、Fはすぐにフクロウの正体が、エリザリザにより変身した老女であると判断した。Fは使用人のAと母方の甥のGを呼び、二日がかりで銃でフクロウを撃ち殺した。フクロウが死ぬと、老女は「Fは私を殺した！ Fは私のフクロウを殺してしまった！」と言って泣き叫んだ。間もなく老女は病に伏したが、回復後の彼女の左上腕には銃創が付いていた。その後すぐに、村の外れで一頭のメスゴリラが見かけられるようになった。Fは、とうとう老女がジル・エリザリザになって自分を攻撃しに来たのではないかと直感した。そこでFは、先日フクロウを撃ち殺したAとGを再び呼び出して、このメスゴリラの追跡をさせた。AとGがゴリラの跡を付けてゆくと、ゴリラは水の傍から片時も離れずに歩いてゆく。AとGは狙いをつけて10発も発砲したが、ゴリラは巧みに銃弾を避けて逃げ回った。

これは、近所に住んでいるおばあさんが妖術師であって、その人が雌ゴリラになってひたすら襲い続けてくる、という話です。エリザリザというのは、動物になる——動物に変身する——ための超自然的な能力を指す言葉です。それで、銃で撃っても撃つ

ても雌ゴリラは逃げまくって、なかなか殺されることはない。それでまた翌日家の真ん前に座って挑発してくるという、タフでしつこいイメージです。もう一つのパターンでは、人間ゴリラは、非常に明るいというかむしろ親しみを覚えるような現れ方をします。

【事例2：葬式でダンスを踊る人間ゴリラ】1988年ころ、バクウェレ男性Dと擬制的親族関係にあるバカ・ピグミー男性Bが亡くなった。Dの家の裏で土葬が終わり、葬式のダンスの準備をしていると、Dの家の前の戸口にゴリラが突然現れた。人々が驚いていると、ゴリラはあたりをうろろろするだけでなく、男たちの雑談小屋の中に入って中から手を振ったので、死んだ男性のジル・エリザリザだと分かった。太鼓を叩くと、リズムに合わせて道の上でゴリラは踊った。葬式の後、1ヶ月近くこのゴリラは村の周りをうろついたが、エリザリザなので放っておいた。その後ふいにいなくなった。

この事例は、亡くなった男性がゴリラに生まれ変わって、自分の葬式の場に出てくる話です。ふいに葬式に現れたゴリラが、故人が親しく過ごしていた雑談小屋のなかに入って、そこから手を振ったり一緒にダンスをしたりする。実は、これに類似した話は他の人類学者によっても記録されています。例えば、ケーラーは、農耕民の死んだおじさんが、ゴリラになって彼が生前よく丹精を込めていた焼き畑に頻繁に現れて、じっと道行く人々を眺める、という話を報告しています（Köhler 2005）。この場合、このゴリラはあの人の生まれ変わりに違いないという形で認識されて、積極的に殺されたりとか追い払ったりということがありません。ゴリラのなかに、真正のゴリラではない人間ゴリラが混じっているというふう考えられているわけです。そして、人間ゴリラには二つパターンがあって、そういった人間（農耕民）がゴリラに生まれ変わる、というパターンと、妖術の素——バクウェレ語でエリエーブ（elieeb）と言います——を持っている人間が、ゴリラに変態して他者に危害を加えるというパターン、そういう二つのパターンがあり得るというお話をしてきました。どちらも、ごく近隣に住んでいる農耕民への表象と対をなしたイメージが抱かれているわけです。こういった物語は、村や森のキャンプの農耕民のいない場所で繰り返し語られます。

このような象徴的な次元のイメージが、実際に森のなかでゴリラに出会うことになるバカ・ピグミーのハンターたちの経験に少なからぬ影響を与えており、さらにそのハンターたちが実際にゴリラと遭遇した経験が象徴的な物語にフィードバックされて、リアリティを与えている、というような循環が指摘できるかと思います。霊長類学者によれば、ゴリラ

は身体が大きいうえに地上をゆっくり動くということで、武器を持った人間に対して一方的に不利であるとも言われていますけれど、バカ・ピグミーのハンターによれば、ゴリラも人間に不意打ちを食らわせて来たりすることがあるそうです。たとえば、鼻を食いちぎられたバカ・ピグミーのハンターは、非常に敵愾心を持ってゴリラに向かうようになったという話もあります（写真4）。



写真4 ゴリラとの格闘について語るバカ・ピグミーのハンター

写真提供：林耕次博士（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

バカ・ピグミーのハンターたちは、ゴリラの危険性や暴力性を強調する一方で、ゴリラの知性であるとか、ずる賢さといったものについて、非常に興奮して語ります。その語りのなかには、むしろある種の尊敬の念がこもったようなものもあります。たとえばゴリラは、個々のハンターの顔を覚えていて、対面して遭遇したときには挑発してくる、といった語りでありますとか、あるいはゴリラがハンターに追跡されていると察すると、うまく頭上に登って自分の足跡を消してハンターをまいて騙すとか、そういったゴリラの知恵について語られるとき、ゴリラは個性ある人格としてあつかわれます。そこには、否定的なイメージのみならず、明らかに肯定的なイメージが混じり合っています。このように、ハンターのゴリラ認知には、凶暴な側面と温厚な側面という二重性が見られるということが大きな特徴です。また、どの個体が人間ゴリラかは殺してみないと分からないと言われます。ハンターからゴリラとのエピソードを聞いていて、非常に面白いと思うのは、人とゴリラが会おう状況に依存して、そのあとのインタラクションが決まっていくということです。人間ゴリラが単なるゴリラなのかどうなのかということは、結果的には前後の文脈のなかで人が決めるのですけれども、人の側の事情だけで決まっているわけではないという点です。人とゴリラの出会いのタイミングであるとか、ゴリラの現れ方によっても変わっ

てくるわけです。バカ・ピグミーやバクウェレの語りからは、インタラクションを繰り返す中で、あるゴリラが、単なるゴリラではなく、特定の「あのゴリラ」として社会性を帯びてくる様子が窺えるのです。そこでは、種とか群れとかという「類」や「集団」ではなく、「個」として、ゴリラは行為選択の対象となっているわけです。

次に、農耕民が狩猟採集民をどう見ているかという側面について触れておきたいと思います。コロブスザルにまつわる事例を挙げます。

【事例3：悲鳴を挙げたコロブスザル】バクウェレ男性Aは、日も暮れかかった夕方に偶然自分の焼畑を通りかかった。Aは、1匹のコロブスザルが畑でトウモロコシを食べているのを発見した。銃を取りに家に走り、息せき切って畑に戻ってきたAはまだ畑に残っていたコロブスザルを鉄砲で撃った。しかし、弾が当たった途端に奇妙な叫び声が上がった。鉄砲で撃ったコロブスザルに近づいてみると、そこにはサルではなく、なんとバカ・ピグミーの男性Bが呻いていた。幸い怪我はかすり傷で、Aは慌ててBを村に運び病院に連れて行った。

バクウェレは、バカ・ピグミーが頻繁に焼畑に来て作物を「盗む」のを獣害だというふうに理解して、誤って銃で撃ってしまったけれども、このときはたまたま鉄砲の弾がかすめて軽傷で済んだという話です。このようにバカ・ピグミーとバクウェレの両者は、日常生活のなかで互いを半人間や半動物と見なすような負のイメージを相互に投げつけあいながら、共に互いの差異を積極的に維持しようとしています。バクウェレは、あくまで自分たちが優位で、バカ・ピグミーが劣位であるという不平等のイデオロギーを積極的に維持しようとするのに対して、バカはむしろ農耕民との差異を維持しつつもなるべく対等になるように、農耕民との二項対立の境界を曖昧化させ、あるいは無力化しようとしているように見えます。人間ゴリラの事例で顕著なように、両者の分離的な共存は、このような「ままならぬ他者」として立ち現われる象徴的な次元における対立が実際の野生動物との遭遇経験の中で再生産され、日常的な相互行為のなかにフィードバックされることによって循環的に維持されているとみることができます。

#### 4. グローバルな眼差しとローカルな文脈

ここまで、バカ・ピグミーとバクウェレが形成するローカルなコミュニティにおける「眼差しのせめぎあい」についてみてきました。このようなミクロな関係性は、より大きな文脈、例えば外部社会との関係と、どのような関わりを持っているのでしょうか。

時間軸を広げて考えてみましょう。調査地域と外部社会との関わりをみると、18世紀後半以前から続くと考えられる象牙取引から、2000年代にはいつの国立公園の設定まで、さまざまな出来事が挙げられます(図4)。これらのなかで、特に近年のバカ・ピグミーやバクウェレの生活へのインパクトが大きく、画期となったと思われるのは、1980年代以降の熱帯林伐採事業と自然保護政策の二つです。これらは、森のなかを比較的自由に動くことができていたバカ・ピグミーやバクウェレといった地域住民の生活に非常に大きな影響をもたらしています。開発や保護を推し進めるグローバル、リージョナルなアクターがローカルな文脈に入って来たときに、同じ地域住民といっても、バカ・ピグミーとバクウェレでは、外部者によるそれぞれへの対応がずいぶん異なるということがあります。

たとえば自然保護活動が狩猟規制として実体化されるときに、同じ森で狩猟採集活動をしていても、バクウェレのような農耕民の活動は持続的ではないけれども、バカ・ピグミーの活動は持続的だとみなされて、規制がゆるく解釈されたり、あるいは福祉事業で障害者に対する支援をするというときに、同じように松葉杖が必要な人がいても、農耕民は放っておいて、先住民であるバカ・ピグミーを優先して松葉杖を配布する(戸田 2015)、といったようなこと

があります。

こういった区別が、やや無前提にエスニシティをもとになされる理由は、外部からの啓蒙的な事業が欧米を中心としたグローバルな価値観に基づいていることや、国際社会がバカ・ピグミーを社会の中で周縁化された存在としてみならず眼差しに起因していると思いますが、そういった外部からの眼差しを、バカ・ピグミーたちはローカルな文脈にうまく取り込んでいます。例えば、農耕民は死後ゴリラになって森に行くけれども、自分たちは死んだあとに白人に生まれ変わるのだと言う言説が頻繁に聞かれます(Giles-Vernick & Rupp 2006)。つまり、バカ・ピグミーの生まれ変わりが自然保護や福祉活動を行なうミッションのメンバーであるとか、自然保護に関わっている「白人」として自分たちのところに帰って来るのだと考え、それをバクウェレの自分たちへの差別的な振る舞いに対する、新たな対抗言説として使っているわけです。

このように、外部との関わりの中で、従来の農耕民が優位で、狩猟採集民が劣位だとするようなローカルな政治的権力関係が変容しつつあることを背景として、それを積極的に自分たちの伝統的な語りのなかに反映させて取り込んでいくということが見られます。

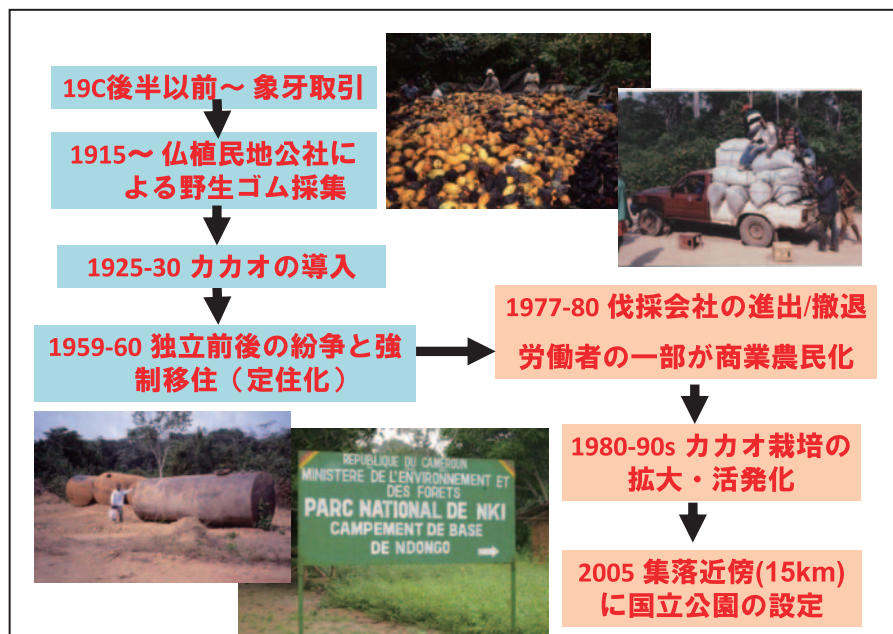


図4 カメルーン東南部の熱帯林社会の外部社会との関わり

## 5. おわりに

ローカルなアクターであるバクウェレとバカ・ピグミーは、いずれも熱帯森林に依存しているのですが、その依存の仕方の違いがもたらす眼差しには相違と重なりというものがあります。その二重性に、ちょうどまくはまる存在としてゴリラという動物がいます。ゴリラに対する人々の眼差しは両義的です。そこでは人が動物であったりとか、動物が人になったりという——人と動物の二項対立を前提とすれば——一見矛盾するような認識論がもちいられるわけですが、このような象徴操作は、曖昧な存在にお互いを置き合うことによって、相手を完全に敵視しない、そういうゲーム装置をよく表しているように思います。その一方で、グローバルから投げつけられる視線をローカルな文脈に取り込むといった動きも見られました。これは、見かけの対立を再生産するだけではなく、模倣による創造の過程でもあると言えるかと思います。こういった、相互への眼差しにおいて、敵味方を明瞭に区別せずに曖昧な存在にとどめておくというやり方は、この地域における異なる存在の共存のあり方のパターンとして特徴的なものなのではないか。つまり「せめぎあう眼差し」があることによって、差異化しつつも親密な関係を維持するということが実現されているのではないのでしょうか。

このような関係は、私たちになじみ深いアニメ『トムとジェリー』における敵対した2匹の主人公に似ています。相互行為研究者の木村大治は、「相互行為の枠」について考察する中で、「利害の対立によって共同性が共有」される事例として、トムとジェリーの関係を取り上げています(木村 2003)。トムとジェリーは、つねに互いを意識しながらも、ネガティブな相互作用を延々と繰り返しますが、バカ・ピグミーとバクウェレの終わらないやり取りは、まさにそのような共同性を想起させるものと言えるのではないかと思います。眼差しを交え、せめぎあわせることの本質には遊びに通ずる楽しさがあるのではないかと、それゆえにつかず離れずの関わりが続いてゆくのではないのでしょうか。世界の多様性を維持するうえで、「眼差しのせめぎあい」が実は大事なのではないかと、そんなふうな考え方もできるのではないのでしょうか。このように提案したところで、私の発表を終わりたいと思います。

## 引用文献

- Devore, I., Lee, R. B. (eds.) (1968; 1999), *Man the Hunter*, Hawthorne: Aldine De Gruyter.
- Galaty, J. G. (1986), "East African hunters and pastralists in a regional perspective: an 'ethnoanthropological' approach," *Sprache und Geschichte in Afrika* 7 (1), pp. 105-131.
- Giles-Vernick, T., Rupp, S. (2006), "Visions of apes, reflections on change: telling tales of great apes in equatorial Africa," *African Studies Review* 49 (1), pp. 51-73.
- Köhler, A. (2005), "Of Apes and Men: Baka and Bantu attitudes to Wildlife and the Making of Eco-goodies and Baddies," *Conservation and Society* 3 (2), pp. 407-435.
- 大石高典 (2012) 「【人間ゴリラ】と【ゴリラ人間】: アフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の混淆」奥野克巳、山口未花子、近藤秋編『人と動物の人類学』(来るべき人類学シリーズ第5巻)、春風社、93-129頁。
- 木村大治 (2003) 『共在感覚: アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会。
- 寺嶋秀明 (1991) 「森と村と蜂蜜と: 狩猟民と農耕民とのインタラクションの諸相」田中二郎、掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社、465-486頁。
- 戸田美佳子 (2015) 『越境する障害者: アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』明石書店。

# ボリビア鉱業の「国有化」をめぐるねじれ

岡田 勇

名古屋大学大学院・国際開発研究科・准教授

## 1. はじめに

先ほどまでの話とは打って変わって、地球の反対側にある南米のボリビアという国における鉱業がテーマとなります。鉱業と言えば、資源ナショナリズムという話が絡んできて、国有化という話が出てくるのですが、これを巡ってボリビアはねじれにねじれている、ということをお話したいと思います。写真1はオルロで撮ったものです。これは、まさに鉱山の麓で発展したオルロという町にある、1960年代に作られた偶像ですけれども、そこにこのような鉱山労働者のモニュメントがあります。写真の労働者が手に持っているのは、シャベルでも機械でもなくてライフル銃なのですが、これがボリビアという国の鉱業というものが、いかに政治的なものであるか、ということをお話しております。この像は1960年に建てられたものですが、1952年の最初の国有化にあたって、鉱山労働者たちは組合を通じて数千、数万人規模のデモを行い、ライフルであるとかダイナマイトを用いてまさに暴力的な手段でもって革命を達成した人たちです。このような背景をもつボリビアの鉱業の話をしたと思います。先ほどの大石さんの話ではどちらかというと、人間どうしが眼差しあい、どのように共存し合うかという話ですが、私の話はその逆方向に行くと言いますか、ひたすら対立が対立を生み、対立に終わっているというような話です。



写真1 鉱山労働者記念碑（オルロ）（筆者撮影）

眼差しという点についてですが、この報告では鉱業を巡る政府と複数の利益集団の関係を扱います。一番重要だと考えていますのは、鉱業というものは国際資源価格の変動にさらされるため、時間的な差異がとても重要で、これからご説明いたしますけれども、資源価格が高いときと低いときではまったく様相が異なり、そのような完全に外的なファクターによってこの国の鉱業、そしてボリビアという国自体が翻弄されてきたことを出発点として指摘したいと思います。そうしたなかで利益集団が複数生み出されてきたわけですが、21世紀の初頭に資源ナショナリズムというテーゼが立ち上がったときに、それに対してインフォーマルなアクターも強ければ、また実は国家財政を支えているのは民間企業の生産活動であったりもするわけで、そういったなかで非常にねじれた関係が作られている、というのが私の報告の非常に簡単なまとめになります。

図1は、ボリビア鉱業の構図を示しています。ボリビアの政府、そして政府に若干くっついているように見える、しかし必ずしもくっついてなくて自立的でもあるのが、国営鉱山という存在です。そのほかの主な生産アクターとしましては、左下の民間鉱山と、それ以外にも一つ、協同組合というものを確認することができます。協同組合というのは、基本的には民間資本なのですが、生産形態としては、家族とか知り合いを通じた、極めて小規模の零細労働者から成り立っていて、ただし組織的には、非常に強い利益団体となっているというものです。

さて、1985年から2002年ぐらいまでの間、資源価格は低迷しておりましたが、国営鉱山は一定の生産

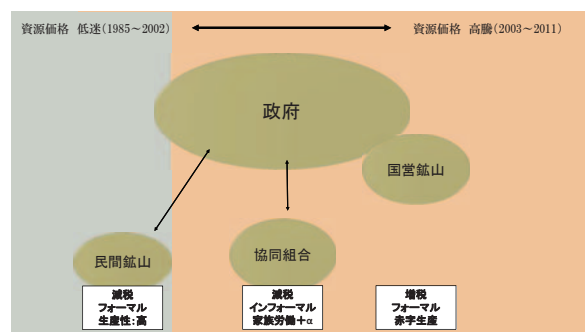


図1 ボリビア鉱業における各アクターの相関関係（著者作成）

コストを抱えていましたので、赤字生産を維持することができず、縮小され、実際にはほぼ解体されます。そこで民間鉱山と協同組合に期待が集まったのですが、協同組合に集まった人々はまさに自活のために生産を続けた人たちです。他方で、民間鉱山に対しては投資インセンティブが導入されましたが、ボリビアでは、民間投資はあまり成長しなかった、というのが2002年までの話です。そうすると民間投資が伸びないなかで、鉱山労働者は協同組合に集まって、この組織が大きく膨れあがるわけです。

その後2003年から資源価格が高騰すると何が起きるかということですが、政府は資源価格が高騰したことによって、余剰利益をさらに獲得しようと、国営鉱山を再活性化させます。しかし、国営鉱山が作られたことによって、民間鉱山が縮小したかということ、実はそれまで投資が流れ込んでいなかったのあまり変わらなかったのです。では協同組合で自活的に活動してきた人たちがどう振る舞うのかということですが、彼らは基本的に資源価格が低いときの勢力を維持したまま、政策決定に介入し続けようとするわけです。これが基本的なダイナミクスのございます。

前置きが若干長くなりましたが、報告の前半では、ボリビア社会における鉱業の位置づけと、そのなかでこれらの生産アクターがどのような立場にあるのかを説明します。後半では、新しい資源ナショナリズムを掲げようとした新鉱業法がどのような末路を辿ったのかというお話をしたいと思います。

## 2. ボリビア社会と鉱業

図2はボリビアの衛星画像です。左下に灰色に見える部分はアルティプラーノという部分で、アンデス山脈の標高3000メートルから4000メートルの山々です。それに対して国土の3分の2以上は、緑色の部分ですけれども、ここはほとんどがジャングルになっております。よく知られているように南米には先住民社会が、植民地化以前から存在しておりまして、このアルティプラーノ、つまりボリビア西側のアンデス山脈に、多数の先住民が住んでおります。またボリビアは、南米で最も貧困層を抱える国として知られております。2002年で60%、2009年でもおよそ50%が貧困層です。

最低賃金、これが重要なのですけれども、2010年の時点で、月収100ドル程度、ボリビアーノスで言うと1000ボリビアーノス程度が最低賃金です。これはあとで出てくる説明でも重要なので覚えていた

ければと思います。経済全体では鉱物資源や天然ガスが輸出に占める割合が非常に高く、一次産品輸出に頼ってきた国と言えます。図3のグラフは、消費についての十分位の表でございまして、上にいけば月あたりの消費額が多い層、下にいくほど少ない層になります。一番高い層においての月当たりの消費額がおよそ1000ドル、一番少ないところでは50ドル、最低賃金以下の層もいます。先住民層がより低い層を占めているということも明らかです。

図4は、どこに鉱物資源が埋蔵されているかということを示しておりまして、今申し上げましたとおり、アルティプラーノ、アンデス山脈のラパス、オ



図2 ボリビアの衛星画像

出典：CEDIB. 2011. *Guía de mapas de tierra, territorio y recursos naturales*. Cochabamba: CEDIB.

貧困率：2002年	62.4%
2009年	54%
最低賃金：2000年	355Bs (57us\$)
2006年	500Bs (62us\$)
2012年	1000Bs (143us\$)
輸出額に占める割合(2010年)：	
鉱物資源	34%
天然ガス	42%

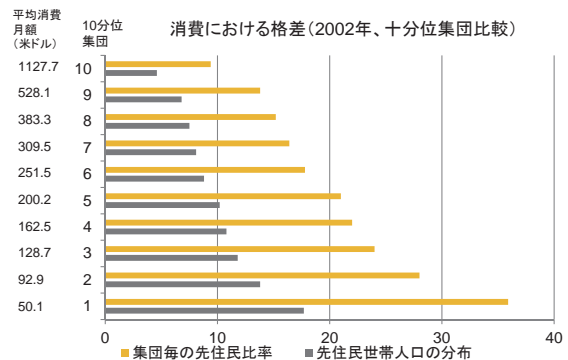


図3 ボリビアにおける格差

出典：筆者作成。「消費における格差」については MECOVI 2002より作成

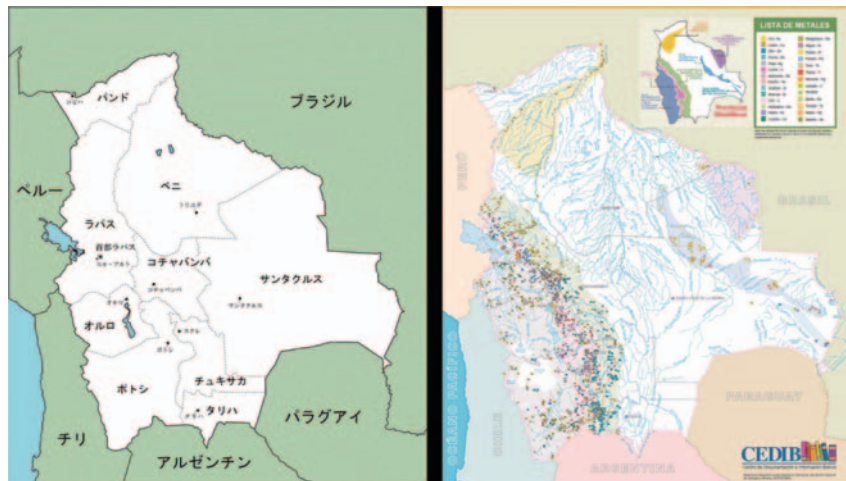


図4 ボリビアにおける鉱物資源の分布

出典：CEDIB. 2011. *Guía de mapas de tierra, territorio y recursos naturales*. Cochabamba: CEDIB.

ルロ、ポトシといった県でさまざまな金銀銅、亜鉛、鉛などが採れます。またラパス県北部で主にジャングルのなかで金が採れる、という状況です。

さて生産アクターがどのように形成されてきたかということですが、このことを考えるうえで、20世紀の国有化と民営化の流れというのを簡単に説明したいと思います。植民地時代に、スペインがセロ・リコと呼ばれる、銀が大量に、しかも高い割合で含まれている山を発見したときから、ボリビアはもう鉱山国としての運命を辿り始めたということが出来ます。しかしもちろん、全世界に銀を供給してきたセロ・リコ鉱山もやがては生産量が減ることになり、19世紀以降は錫の時代を迎えます。その錫の生産のなかでいわゆる錫男爵という利益を集約する一部の国内富裕層が生まれます。それに対する反発とナショナリズムの高まりのなかで1952年に革命政権が成立します。これによって鉱山が国有化され、ボリビア鉱山公社という国営会社が作られます。しかし、まさに運命とは非情なもので、1985年に錫の価格が暴落すると、この国営のボリビア鉱山公社は生産コストを賄うことができず、解体されると同時に3万人ほどの鉱山労働者を解雇し、ネオリベラル改革が導入されます。その後、再国有化を迎えるのは先ほど申し上げましたように、2003年以降のことです。したがって生産アクターとしましては、国営鉱山、協同組合、民間鉱山というのがございます。国営鉱山については、今申し上げましたように国有化と民営化の波によって翻弄されてきました。現在では三つほどの鉱山しか残っておらず、新しい投資は進んでおらず、基本的に赤字生産という状況です。

協同組合はその国有化と民営化の波に対して、いわば自活のために廃坑に留まったり、不法占拠をしたり、あるいはコンセッションを獲得したりするこ

とで、手作業でも採掘を続けてきた人たちです。その操業契約数は1600程度、そのうち金鉱山が900程度となります。いずれも家族、あるいは小規模事業者による経営です。民間鉱山というのは、1985年以降に価格が下落したときに、さまざまなインセンティブが導入されたものの伸び悩んでおり、今では中規模鉱山という、比較的大きいものについては非常に数が限られているという状況です。

### 3. 生産アクターの状況

さて、このような三つの主な生産アクターで働いている人たちがどのような状況にあるのか、ということを考えてみたいと思います。国営鉱山につきましては、今申し上げましたとおり、国有化によって作られたもので、鉱山労働組合が非常に強い力を持って自主的な経営をしております。そのなかで、彼らが頼りにしているのは、国家との政治的なつながりです。平均月収は、一般の労働者のレベルで1000ドルを超えと言われていています。これはボリビアの所得で見ますと、かなり高い、と言うことができます。また生産ボーナスでありますとか、鉱石を国の精錬所に預けず、横流して身銭を稼ぐ、といったことも頻繁に行われると言われていています。さらに組合活動に専念している最高位の幹部、つまり労働組合の幹部は、月あたり1万ドルも稼いでいるということが、公然の事実として言われております。

鉱山協同組合には大きく分けて二つあります。一つはアンデスのアルティプラノに存在する、廃坑になった鉱山で伝統的に続けられてきた協同組合です。一般的に彼らは月収で3000ボリビアーノス、だいたい430ドルぐらいを稼いでいると言われており

ます。ボリビアの所得の分布で見ますと、だいたい中くらいで、出来高次第ではありますけれども、現金収入を見込めるとい意味ではそれほど悪い状況ではありません。ただし、これは鉱山資源価格の上下動に対して非常に脆弱な存在であると言えます。また近年はアマゾン地帯で金の採掘が盛んになっておりまして、地元民が所有権を持っている土地に協同組合を設立して、外部のお金を持っている人から投資を受けつけて、彼らと一緒に稼いでいく、という例が数多くあります。ここに関わっている人たちは、月収は1万ドルを超えています。金鉱山ということもありますが、非常にもうかっているということが知られています。

民間鉱山については、国営鉱山における労働者よりも良い、と言われております。ただそれだけではなくて、協同組合にはない社会サービスでありますとか社会保障が充実しており、それだけ恵まれた状況にあると言われております。ただし、民間投資は、価格が低かったネオリベラル改革期も含めて伸ばしてこなかったという背景があります。ただ、そうしたなかで民間鉱山の中でもサンクリストバル鉱山については、国内でも筆頭の高額納税企業であるという事実があります。

図5は鉱業ロイヤリティの支払額を示しておりますが、1985年以前は国営企業がほぼ大多数です。それに対して2005年ころから鉱物資源価格が上がってくるなかで、どこが最も税やロイヤリティを払ってきたかと言いますと、民間鉱山で、それに続いて協同組合です。国営鉱山は再活性化を試みたものの、あまり進んでこなかったと言えます。もう一つは図6の労働者数ですが、はっきり目に見えて飛び出た一本のグラフは、協同組合の労働者です。それに対して、民間鉱山、国営鉱山は労働者数については、極めて少ないということが出来ます。これは三つの生産アクターの生産状況についての違いと、もう一つ重要なこととして、いずれも全国レベルで極めて強固に、利益団体として組織化されていることを考えますと、政治的な影響力も顕著に表しているとも言えることができます。さて、そのような政治的な影響力がどのように政策決定に関わるのかが私の一つに関心であります。ただ、まだ研究の途中段階でもございますので、非常にかいつまんで一体何が起きてきたのか、そしてそれがどのように結局のところ問題なのか、ということを端的にお話したいと思います。

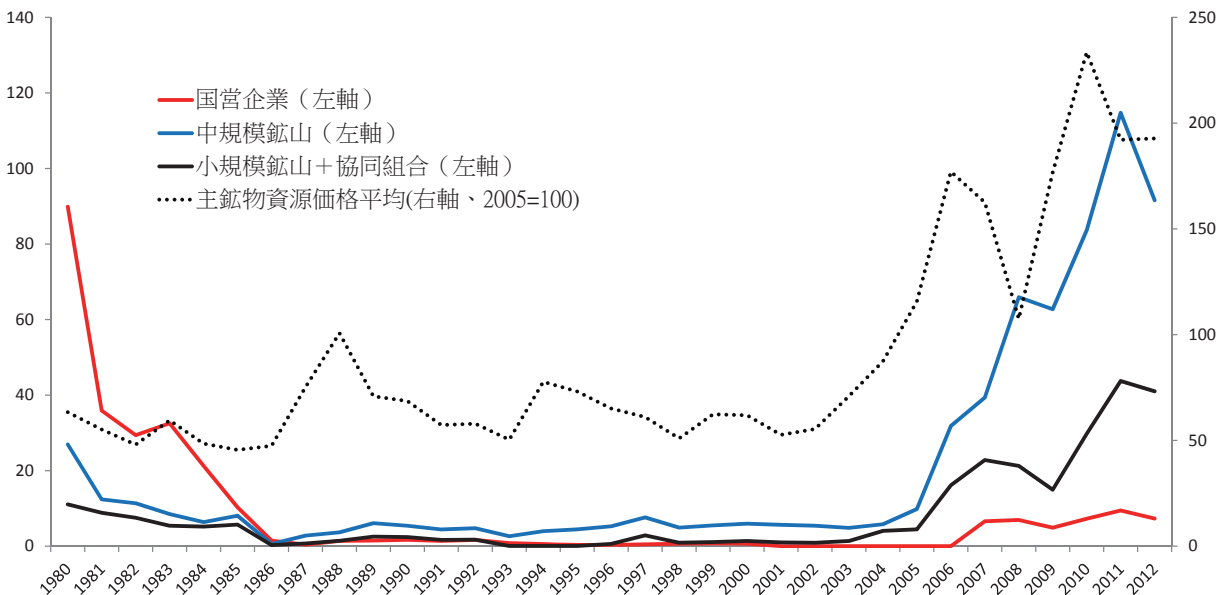


図5 鉱業ロイヤリティ支払額 (単位: 百万米ドル)  
出典: 鉱業ロイヤリティ額は鉱業冶金省の年鑑より、鉱物資源価格は IMF より筆者作成。



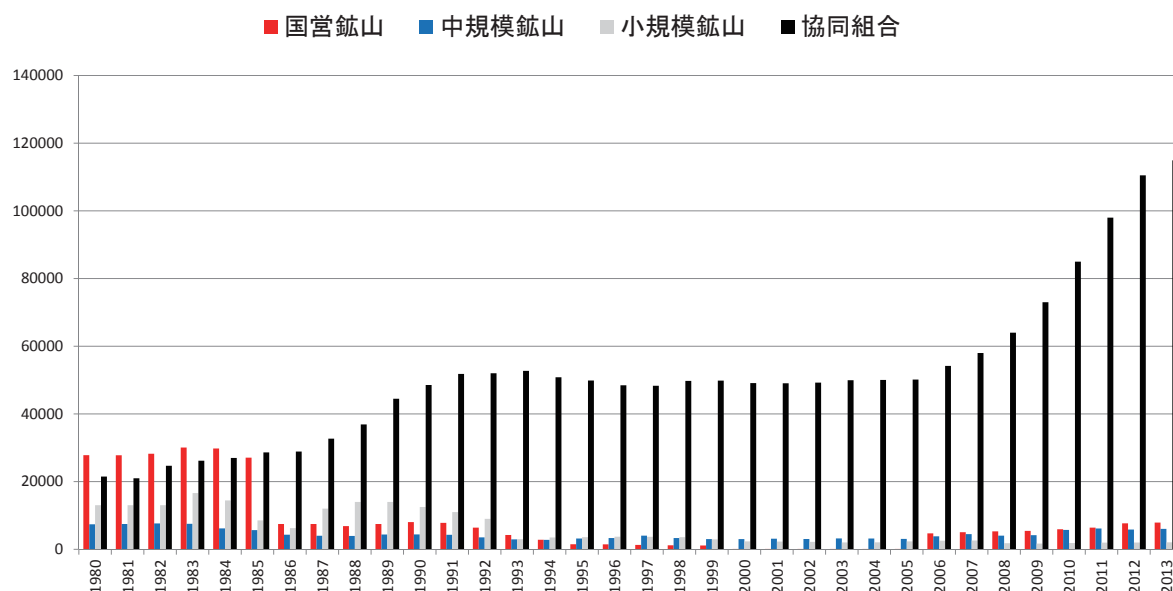


図6 生産アクター別の労働者数  
出典：鉱業冶金省の年鑑より筆者作成。

#### 4. 新鉱業法の制定過程

新鉱業法は、2003年以降に高騰した資源価格を反映しています。当然ながら国内の政治的な状況というものもありますが、新鉱業法が必ずしも作られなければいけないということではなかったのかもしれませんが。ただ、運命は皮肉なもので、もう一つボリビアの経済を支えている天然ガスについて、2005年に国有化が決定されたという背景があります。天然資源に対するボリビア人の精神的な感情としましては、かつては植民地時代から一部の富裕層を潤してきた、そしてさらにネオリベラル改革で民間化されるなかで、やはりそれも一部の富裕層を潤してきたのではないかと考えられています。天然ガスが国有化されたことで資源ナショナリズムが高まり、2006年にエボ・モラレス政権が成立したときに、国家開発プランのなかで、鉱業についてもやはり国家管理を目指そうとする気運が高まっていきます。2009年2月に成立した新憲法のなかでは、その追加条項のなかで、新政権が発足してから1年以内に新しい鉱業法制に移行すべし、ということが規定されていました。しかし、この新鉱業法をどう作るかというのは、これまで述べましたように三つの主要な生産アクターの政治的な力、経済的にどれだけ貢献しているのか、そしてそのなかで影響を受ける人々の数、といった点から非常にねじれたものを生むことになります。

2010年12月に予定されていた新鉱業法は、結局、2014年5月まで成立が遅れました。各アクターにとつ

ての利益と権力資源をまとめたのが表1となります。まず、政府にとっての利益ですが、言うまでもなく政権を維持するということが重要で、利益団体が圧力行動を行ってくるのに対して譲歩する、あるいは、逆に便宜供与をすることによって、自らの政権をより確実なものとしします。他方でイデオロギーとしては、先ほど述べましたように国営鉱山を促進したいという思惑があります。しかし矛盾する点として税収も増やしたい、そうしなければ、やはり資源価格の上下動に対して非常に脆弱な体制が残っていく、これらの矛盾した利益というのを政府は抱えています。そしてボリビアで顕著なのは、ほかの国でもおそらく似たような状況かもしれませんが、警察や軍によって圧力行動を暴力的に弾圧するというのは、基本的には非常にに行にくいという状況です。

国営鉱山公社は、政府の一部ではありますが、先ほど述べましたように自主的な経営を行っておりまして、基本的には労働組合の手中にあります。労働組合は国営鉱山を増やすとともに、それまでネオリベラル改革下で自由に認められてきた鉱業コンセッション自体を変えることによって、自らの権力基盤をさらに確保したいという思惑があります。

協同組合については、必ずしも法のなかに入っておらず、既存コンセッションを持っている人たちもいれば、そうではなくて、不法占拠によって活動している人たちもいます。彼らは、新しい法律の制定にはとても抵抗的で、また同時に民間資本でもありますので、増税に対しても拒否姿勢を示しています。また、その政治的な影響力があまりにも強いことか

表 1 各アクターの利益と権力資源

アクター	利益・イデオロギー	権力資源	備考
政府 (大統領・副大統領・鉱業冶金省)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政権の維持</li> <li>・国営鉱山の促進</li> <li>・税収増</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政策決定のアジェンダ設定？</li> <li>・警察・軍の動員は限定的</li> </ul>	個人によって何を重視するかは異なる
国営鉱山公社 (COMIBOL) 鉱山労働組合 (FSTMB)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国営鉱山の増加・拡大</li> <li>・既存のコンセッション形式の変更</li> <li>・構成員の給与増、投資獲得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政府へのアクセス</li> <li>・中央労働総連 (COB) のトップ</li> <li>・デモ、道路封鎖などの恣意行動</li> </ul>	強固な全国組織 (構成員 6 千人程度)
鉱山協同組合 (FENCOMIN)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・採掘活動領域の拡大</li> <li>・既存コンセッションの維持</li> <li>・免税など既存の特権の維持</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国会議員や地方政府首長を通じたロビイング</li> <li>・デモ、道路封鎖などの恣意行動</li> <li>・選挙における組織票</li> </ul>	強固な全国組織 (構成員 12 万人程度)
民間企業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既存コンセッション・JV の維持</li> <li>・利益の確保</li> <li>・減税</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模鉱山は 4 つ</li> <li>・小規模鉱山は多くが操業していないか不法占拠にあう</li> </ul>

ら、これまで税金やロイヤリティの面で優遇税率、あるいは免税といった特権を維持しておりまして、これを維持し続けたいという思惑があります。

民間企業につきましては、非常に少数の鉱山しか残っておりませんが、既存コンセッションを維持し、減税をするというのが、彼らの思惑です。

権力資源についてもう少し付言しますと、国営鉱山公社の労働組合は、ボリビアの全労働組合のトップを歴史的に占めております。またそういったものを通じて、政府のなかに直接のアクセスを持つと同時に、デモであるとか道路封鎖などを行います。協同組合も、政府に対してそれほど近い関係にありませんが、すでに協同組合を出身とする国会議員であるとか地方政府の首長を輩出しておりまして、それらを通じてロビイングをしたり、あるいは、ダイナマイトを持って、数万人が首都でデモ行進をしたり、道路封鎖をしたり、といった示威行動を行います。これらに対して、政府は基本的には暴力的な弾圧はできず、常に交渉と譲歩を余儀なくされるという状況であります。

次に、簡単に 2006 年から 2014 年までに一体何が起きたのかということをお話したいと思います。先ほど申しましたように、2006 年に国家開発プランにおいて、鉱業についても国家管理化を進めるという話がありましたが、これに対して同年中に、最初の新鉱業法案というのが作られました。しかし、すでにその時点で、それを進めた人物というのが協同組合の輩出した人物であったことから、対立を生み、その大臣は失脚することになり、初めての法案は廃案になります。

その後、政府は、所管官庁である鉱業冶金省の下で鉱業法案を作ろうとします。新憲法に定められた 2010 年 12 月という約束の時期までに、関係アクターが話をして鉱業法案を作ります。しかし、法案がで

きて、大統領が署名する間近になって、協同組合の代表は大統領と直接話をし、それは私たちの意見を受け入れたものではないと主張し、破棄することを要求します。そして実際、大統領は協同組合の意見を受け入れることになります。その後、再び新鉱業法案はゼロに戻ります。

次に三つ目になる鉱業法案ですが、これは協同組合と民間鉱山から送られたコンサルタントたちが、この法案の起草作業のイニシアティブを握り、そして彼らの主導のもと、最終的には鉱業冶金省などの抵抗を押し切って、大統領にこの法案を制定させたという事実があります。そのなかでさまざまな交渉がありましたが、基本的には構成人数という意味で力があつた協同組合のなすがままになったと端的に結論付けられます。

さて、新鉱業法案で何が決まったかということをご簡単に紹介しますと、まず法的には、国営鉱山、民間鉱山、協同組合というのが、生産アクターとして認められました。資源ナショナリズムとしての、一つの重要なポイントである契約形式については、鉱業コンセッションから操業契約への移行が定められました。ただし、過去に取り決められたすべての契約は、その対象から外されるということになりました。税制につきましては、あまりにも議論が紛糾し収拾がつかなくなったために、この新鉱業法案のなかからすべて除外される形となりました。これは、言い換えますと、協同組合についてはそれまでの免税などの特権が維持されたということを示します。

## 5. おわりに

ボリビアのこの新鉱業法案をめぐる状況がどのような点で難しかったのかということをもとめると、表2のようになります。法の適用の度合、もしくは法というものの自体を受け入れるのかどうかというのが一つ目、国営生産にするのか民間生産にするのかというのが二つ目、三つ目はそもそもそれをやって税金が増えるのかというポイントです。法の適用度については、国営鉱山と民間鉱山は当然受け入れるわけですが、協同組合は、それまで自分たちの力で自立的にやってきたということもありますし、また彼らが非常に強い示威行動を行う能力を持っているということもあって、法の適用自体から逃れている、もしくは非常に強い影響力でもって彼らが法の適用外に置かれるようにうまく圧力行動を行うというのが事実であります。この点でまず、法律を作るかどうか難しい状況だったといえます。ただ、それはそれとしても、彼らの意見を受け入れながら新しい法律の形態を考えることはできたはずで、しかし、国営化、民営化という話、出発点の話なのですから、これを支持しているのは国営鉱山の人たちだけで、ほかはすべて既存の契約を維持したかったということがあります。さらに、生産性がどうかということについては、これは、民間鉱山のみが貢献度が高く、国営鉱山は赤字生産でありますし、協同組合はそもそも税金をほとんど払っていないので、国家に対する貢献度は低いという状況です。そういった三つ巴のねじれのなかで、彼らは一定の均衡点を見つけることができず、そのなかで、アジェンダ設定権を握ったのが協同組合と民間鉱山であったということは重要であったと思いますし、もう一つは構成員の数で、政治的な影響力が明らかに違っていたということで、協同組合に有利な形で法律ができたのではないかと思います。

さて、ボリビアの鉱山に関わるさまざまな人たちのドロドロした話があるというイメージを持っていただいたと思います。たとえばグローバルでの動きとそれぞれの国のなかのさまざまな団体との関係

が、どういうことを意味するのかということをおなりに考えてみました。そもそも鉱業というのは、あるいは鉱業だけではなくて多額のレントを生む産業は、特異性があるのではないか、と思われます。生産形態がグローバルな価格変動に対してダイレクトな影響を受けやすいと同時に、多額のレントを生むということで、そのグローバルな価格の変動が、その産業自体だけではなくて、その国家におけるさまざまな制度形成においても影響を与えるということが言えるかと思えます。また、20世紀を通じて、国有化と民営化の間を行き来する振り子現象があったということは、それが、鉱業や天然ガスなどの産業を通じて、それぞれの国に影響を与えるものであり、それが非常に対立的なイデオロギーを作ってきたと言えるかと思えます。

そうしたなかで、なぜ三つの利益団体に分かれているのかということをお考えたときに、まだあまり考察が深められておりませんが、やはり、資源価格の上下動に対して、あまりにも短期的な視野で利益団体が形成されたことです。そして、皮肉なことに、それらがある時点で作られて、政治的な権力として確立すると、経路依存的な影響を持って、また後の時代においては、本来は国営鉱山のなかで経営、生産し続けることができたかもしれない、あるいは、民間鉱山に吸収することができたかもしれないものが、協同組合という非常に強力な利益団体として維持され続けてしまったのではないかと思います。そのため、ねじれた関係がグローバルな影響をもとに生み出されて、それが露骨な形で表れたと考えられるのではないかと思います。ほぼ時間となりました。まだきちんと説明しきれていないか少し不安ではありますが、これで私の報告を終わりたいと思いません。

[付記] 本報告は、日本貿易振興機構アジア経済研究所の共同研究「21世紀ラテンアメリカにおける国家と市民社会組織の関係」ならびに科学研究費補助金（研究課題番号：13J02254、2013～2014年度）の成果の一部である。

表2 ボリビア鉱業の構図

	法の適用度	国営・民間	生産性	構成員 (労働者のみ)
国営鉱山	高?	国営	低	6千人程度
協同組合	低	民間	低(ただし多数)	12万人
民間鉱山	高	民間	高	6千人程度



# コメントと総合討論

## コメント

村上薫（アジア経済研究所）：

私は、アジア経済研究所で、トルコの主に都市の貧困層出身の女性にインタビューしながら、彼女たちの貧困観や家族観といったことについてこれまで調査をしてきました。最近、イスタンブールの貧困地区で、公的なものを中心に貧困救済活動が盛んになっています。貧困層を望ましい国民へと誘導する、あるいはそこに至らない人たちをいかに、保護の対象——ある意味では憐憫の対象——として固定化していくかという、一種の統治の仕組みとして、公的扶助制度がどのように機能しているかについて調べています。統治する側の視線だけではなく、統治される側の貧困層の女性が、こうした援助をどのように捉えているのか。そして、どのように自分たちを統治して欲しいのか。つまり権力を持つ側には立てないけれども、いかに統治されるかということに対して、何らかの希望や要求を統治する側に——突きつけるといったら変ですけども——提示しているのか。そういった交渉がうまくいっているのか、いっていないのかについて関心を持っています。そうした観点から今日のご報告を伺わせていただきました。

四本のご報告はバラエティに富んでいて、それぞれに豊かな内容を持っていて、非常に興味深く伺ったのですが、総合的に何かと言われると戸惑うというのが正直なところ。ただ、私なりの感想を申し上げますと、今日のご報告に共通する大きなテーマは、必ずしも平等ではない、力関係のある諸集団のなかで、理解や共存、あるいは、より平等な力関係に向かってのヘゲモニーの変容がいかに可能であるか、という点にあったと理解しております。

最初の二本、アメリカの原子力政策に関する樋口さんのご報告、それからドヴォジャークの音楽についての福田さんのご報告は、二つの集団の間、あるいは地域の関係性のなかで、いかにヘゲモニーが弱者に有利な形に変容しうるか、辺境的なものに有利な形でヘゲモニーが逆転していく可能性があるのかというお話でした。つまり、ヘゲモニーの逆転の成功例のお話ではなかったかと思えます。例えば、ドヴォジャークについて、田舎者とか、後進性とかと

いった言葉が出てきましたけれども、それでもやはり何かの議論がそこに生まれる。そして、結果としてクラシック音楽の範囲そのものが広げられるような契機になったという意味では、ヘゲモニーに揺らぎが生じた事例であったと理解しました。

三番目のカメルーンに関する大石さんのご報告も興味深く伺ったのですが、ここではむしろ、ヘゲモニーの変容が目指されるというよりは、異なる力関係あるいは資源を持っている集団の間の分離共存、つまり、交じり合うことなく、しかし対立することもなく共存するということがいかに成功しているかというお話であったと思います。ですから、必ずしもヘゲモニーの逆転ということではなくて、現時点でのヘゲモニーをいかに平和裏に維持していくのか。その点のご報告の要点ではなかったかと理解しております。

最後の岡田さんのボリビア鉱山のお話ですけども、これについてはむしろ、均衡点を維持することもできない、かといって、いずれかのアクターが穏便な形でヘゲモニーを変えていくこともできない。むしろ、ダイナミイトを持ったりとか、暴力的なデモをしたり、死傷者が出るという形でしかヘゲモニーの変容が可能ではなかったという意味で、或る種の失敗例であったのではないかと思います。つまり、せめぎあう眼差しが今よりも良い状態を作り出すというのが課題であるとするならば、ボリビア鉱山は成功例とは言えない。こうした点が岡田さんのメッセージであったと理解しています。

以上の点を前提に報告者の皆さんに質問をさせていただきたいのですが、最初のお三方のご報告がいわゆる成功物語として読めるとしたら、それは、いかなる条件のもとに可能であったのか。そして、最後のご報告は或る種の失敗例として出されたわけですけども、なぜ失敗したのか、についてお伺いしたいと思えます。

それから大石さんのカメルーンに関するご報告に関してですが、動物が人間になり、人間が動物になるという動物観を背景に、ゴリラが第三者的な役割を果たすというご指摘があったかと思えます。ドヴォジャークに関する福田さんのご報告では、ヘゲモニー逆転の鍵として触媒という単語が使われていたのに対し、大石さんは第三者という言葉が使われていま

したね。ゴリラという存在が、第三者あるいは触媒として登場してくるというのは、農耕民と狩猟民の人たち双方が意識的に行っていることなのか、つまり、お互いに平和にやっていくためには、ゴリラを使うのが良いと考えて意識的に行っていることなのか。それとも、それは後知恵でしかなく、まず動物観が先にあり、それが結果的に分離共存を可能にしているのか。これは、成功の要因は一体何だったのかという皆さんに対する質問にも共通する話ですが、当事者の工夫といったものが存在するのでしょうか。以上の点について教えていただけたらと思います。

#### 栗本英世（大阪大学）：

専門も違うしトピックも違う4本のご報告を、今日の全体テーマである「せめぎあう眼差し——相関する地域を読み解く」という枠のなかにうまく位置づけられるようにコメントしたいと思います。まず、この眼差しという概念は、20年ぐらい前から十数年前くらいまで流行った概念なんですね。せめぎあう眼差しとか、交錯する眼差しという概念が、本や雑誌の論文のタイトルとしてよく使われていました。2015年にこの概念をタイトルに使うのがもう時代遅れであると言いたいわけでもないのですが、その眼差しという概念には、当然、眼差す主体と、眼差される客体というのがあるわけですね。見るほうと、見られるほう。近代においては、圧倒的にヨーロッパ人が非ヨーロッパ人を眼差してきたわけです。それがあらゆるメディア、研究、文学、芸術、絵画、それから映画その他に残っているわけです。その意味において、眼差しは一方的なものです。しかしながら、眼差されていた側、つまり非ヨーロッパの人たちも、ヨーロッパ人を見ていたわけですね。でも、見ていたにもかかわらず、それはなかなか記録に残らない。その辺りが眼差し研究の出発点だったわけです。ですから、その根本的な問題は、両者の間の権力関係、あるいはヘゲモニックな関係であって、そういった点が、いわば文化表象の政治学というような形で研究の対象になっていったわけです。

私自身も振り返ってみますと、1997年、つまり国立民族学博物館に所属していた時ですが、「異文化へのまなざし」という特別展に関わったことがあります。これは、大英博物館の資料を借りながら、日本、それから西洋、オセアニア、アフリカの四つの地域に跨がる多方向的な眼差しの交錯をテーマにした展示だったわけですね。1999年には、福田さんが言及してくださった『植民地経験』<sup>1</sup>という本を編集しまし

た。これは、植民地化する側とされる側の眼差しの交錯をテーマにした本だったわけですね。そこで面白いのは、眼差すほうの権力の側の人たちも実は見られているという点です。つまり、主体の客体化ということですね。それから、一方的に見られていると考えられてきた人たちも、実はちゃんと見ていたということになります。つまり、単なる客体じゃなかったということですから、これは客体の主体化ということになります。さらに、もう一つの眼差しとして、研究者の眼差しが挙げられます。研究者は、眼差す側と眼差される側との関係を一体どういう立場で、どういう眼差しで見ようとしているのかという問題があります。以上がコメントを述べるにあたっての前提となります。

樋口さんの放射能汚染問題に関して最初に感じたのは、アメリカの支配階層の眼差しというのは、地球を俯瞰する神の眼差しに近いのではないかと、いう点です。その道徳的な不遜さとか、僭越さに改めて驚かされたわけです。それで、私がお尋ねしたいのは、特に現在のアメリカで、こういった冷戦時代の眼差しのあり方というのがどのように捉えられているかという点です。アメリカの支配階層は、果たしてちゃんと自己批判しているのかということですね。より一般的な問題としては、科学者の研究倫理の問題です。人類のためといいながら、実は国益のためにやっていたという問題も、今のアメリカでどう議論されているのか教えていただけたらと思います。



福田さんのドヴォジャークの話ですが、面白いなと思ったのは身体ですね。見る・見られるのなかには、言うまでもなく身体性というのがあって、近・現代のヨーロッパでは、やはり辺境的な身体というのが明らかにあるのですね。19世紀のヨーロッパの人種論、あるいは犯罪学とも結びついた見方によれば、背が高く顔が細長くてすらっとしてる人が貴族的

1 栗本英世、井野瀬久美恵編『植民地経験：人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院、1999年。

で、その対極というのがあるわけですね。紹介して頂いた絵では、ドヴォジャークは背が低くてがっしりした身体として描かれています。正にその対極にドヴォジャークが位置していたのではないのでしょうか。別の言い方をすればネアンデルタール的——ネアンデルタール人は19世紀半ばに発見されたとはいえ、ドヴォジャークの時代にそのような言い方がされたかどうかは定かではありませんが——、端的に言えば原始的で野蛮に見られてしまう。体型も含めた身体の問題が、眼差しを考えるうえで重要だということを改めて思いました。そして、もう一つ重要な点は狭間という概念ですね。狭間は空間的にいうと境界地域であり、英語ではボーダーランドやミドルグラウンドといったところでしょうか。このどっちでもない地点、どっちつかずの状態、別の言い方をすれば、ハイブリッドとしての狭間。関連する地域というものを考えるときに狭間に注目し、その狭間から見たときに両方がどう見えるのか。その点が非常に重要だと思いました。

大石さんのご報告で一番重要なのは、私たちと彼らとの関係性の中に動物も含まれてしまっているという点ですね。我々は通常、私たちと彼らの間の区分とか境界線とかについて考えているわけですが、実はその中には、人間だけじゃなくて、ゴリラやサルも、その他の動物も広い意味の私たちに含まれている。私も人類学者ですから、こういう話は非常に嬉しいのですが、皆さんの中には、こんな話は特殊な事例に過ぎないのではないかとと思われる方がいらっしゃるかもしれません。しかし、自然環境と人間の関係とか、野生動物との共存といった問題を考える際には、こういう見方があるということは非常に重要だと思えます。また、先ほどの狭間の問題から考えると、農耕民と狩猟採集民の間にも狭間があります。どっちつかずの人とか、あるいはあっち行ったりこっち行ったりする人ですね。ときには農耕民である、ときには狩猟採集民であるということが当然あるわけですから、やっぱりそういう側面に注目していくことも大事ななと思いました。

岡田さんのご報告に関してですが、ここでせめぎあっているのは、眼差しというよりもむしろ利害ではないのでしょうか。大石さんのご報告と関連づけると、大石さんは、利害の対立による共同性、つまり、対立しているにもかかわらず逆説的に共同性が生まれるということを述べられています。その点を岡田さんのご報告に適用すると、なれ合いも共同性的一种ということなんですね。つまり、労働組合のボスと政治家の或る種のなれ合いの上に成立している世界ということになるのですが、それを共同性とは言

えないでしょうか。そういった問題の立て方も可能ではないかと思いました。

時間があるということですので、蛇足かもしれませんがもう一つ話をしたいと思えます。冷戦時代におけるアメリカの支配階層の眼差しは、地球を俯瞰するような神の眼差しだったのではないかと、という点を先ほど申し上げましたが、そこですぐに連想が結びついたのが「地球儀を俯瞰する外交」、つまり、我々の首相が主張している外交ですね。これは、アメリカのようになりたい、あるいは、アメリカともっと親しくして、一緒に世界中に軍隊を送りたいという考え方にも通じているわけですが、それでは、安倍首相の世界観のなかで、あるいは日本外交のなかで、相関する地域とは一体何か。それから、その個別の地域への眼差しは一体何かということも併せて考えてみると、アカデミックな意味で面白いのではないかと思いました。以上です。

## リプライ

### 樋口敏広：

まず、村上先生のご質問ですが、正にヘゲモニーの逆転と考えられる事例だと思えます。では、どのような条件で、いわゆる逆転可能性を実現したのかという点ですが、ヘゲモニーの逆説、つまり、あまりにも不平等で一方的なときに意外と隙が生まれるということではないかと思えます。グローバル・フォールアウトの場合は、排出国がまず圧倒的に限られるという意味で、不平等の極端な例を示しているわけです。たとえばCO<sub>2</sub>の排出とはまったく違う構図なわけですね。ですから、排出する側と排出される側の構図が非常に極端だからこそ、逆にそれが見えてくるという、そういう逆説があると思えます。そもそも、安全保障というものは、一方的な眼差しの究極的な例だと思うんですね。そして、冷戦という究極の対立の中において、アメリカが世界の平和を守ろうとする。自分の平和だけじゃなくて、自国の平和と世界の平和を重ねているわけですね。だからこそ逆に異議申し立てができる、そういう逆説的な面が含まれているのが、安全保障の問題ではないかと思えます。

次に栗本先生のご質問についてですが、アメリカの支配階層が、地球を俯瞰するいわゆる神の眼差しに立って色々物事を考えていたわけですが、それが今はどのようになっているのか。自己批判をしているのかということ、私は残念ながらそれはないと思えます。むしろ拡大再生産を続けているようにも思い



ます。というも、冷戦時代のアメリカは、軍事や経済の分野で地球規模でのシステムを構築してきましたが、最近では、金融や情報の分野でも進めています。つまり、アメリカは地球規模のシステムを作って、しかもそのリスクも自ら生んでいるわけです。冷戦時代には核実験で世界を巻き込んだ。それが良いと思ってやったわけですが、そこからリスクとしてのグローバル・フォールアウトが出てくるという構図は、リーマンショックと同じなのかもしれません。ただ、アメリカの場合、私が興味深いと思うのは、自らも自らが生み出したリスクに脆弱性を持つという点です。正にリーマンショックがそれです。だからアメリカとしては、自分のシステムが作った地球規模のリスクをすべて知りたい、自分自身もそれに脆弱だから知りたいんだという、非常に強い動機があります。

この点は科学者の倫理の問題という次の問題にも関わってくるのですが、やはりアメリカの科学者というのは、地球規模のシステムのリスクを除去する技術的なアドバイスとか、つまりそれを把握するという非常に高い関心を持つのですが、それを元々生み出したような構造については、批判的な視点はないわけですね。やはりフォールアウトが飛び散って、これがどうなっているのかという点に非常に関心があって、それをもって世界を救っているという感覚があります。正にそれがアメリカにおける科学者のオーソリティの部分でもあるわけなんです。それは結局のところ——些末と言っても言い過ぎかもしれませんが——テクニカルな内容に過ぎず、そこで根本論を話すとか構造論を話すというところには行かないというのが、アメリカ内部における限界ではないでしょうか。他者という見られる客体が主体になるというご指摘がありましたけれども、私の例でいいますと、見られる地域が自ら調査を行うという契機はやはり必要であって、支配階層や科学者といった見る側からのアプローチだけでは客体の

主体化は起こらないように思います。

「地球儀を俯瞰する外交」についてですが、非常に重要なご指摘だと思います。敵と味方明確に分けて考える発想においては、本来であれば、ゴリラを間に入れておけばなんとかなるような対立を、にっちもさっちも行かなくしてしまう。隙間というか、狭間がないような状況を作り出すのは危険だと思います。特にアメリカの国家安全保障概念においては、脅威そのものが存在する条件をなくすという発想が見られますが、では、日本はどこに向かおうとしているのか。この点については考えていく必要があると思います。

#### 福田宏：

栗本先生に身体の問題を挙げて頂きましたので、その辺りから話をしていきたいと思います。個人的な話で恐縮ですが、以前、身体とナショナリズムの関係について研究していたことがあって、その関係で体育学会に所属していたことがあります。そのような場で学会報告をするとですね、目の前で聴いてくださっている聴衆の方々は、当然ですが皆さん頑強な身体をお持ちなわけです。それ以来、自分の身体の脆弱さについて意識せざるを得なくなったわけですが（笑）、今回の報告でドヴォジャークの身体に触れたのは、そうした経験があったからかもしれません。

村上先生のご質問についてですが、ヘゲモニーの逆転に成功したかどうかという点については、成功でもあり失敗でもあった、つまり両方だったのではないかと思います。音楽とは異なる話ですが、かつてのイギリス帝国において、身体能力の非常に高いインド人のクリケット選手が「発見」され、イギリス本国に連れてこられたという事例があります。彼は優秀な選手として本国で持てはやされるわけですね。しかし、それによってヘゲモニーが崩されているかという点、全くそうではなくて、我がイギリス帝国の中にはこんな奴もいる、といった程度の扱いだと思います。逆に、現地人の優秀さを寛大にも褒め称える「我々（本国の白人）」という構図を創り出すことによって、「我々」のヘゲモニーを強化してしまうわけです。

実はドヴォジャークについても、似たような構図が成立していたと言えます。辺境の出身にもかかわらず良く頑張りましたという感じで褒め称えられるのですが、結局はエキゾチックな作品で売り出しているだけの田舎者であり、本家本元の西欧には及ばない、という捉え方をされるわけです。その構図に収まってしまっている限り、既存のヘゲモニーは維



持されることになります。

しかしながら、ドヴォジャークはヘゲモニーの逆転をもたらす触媒になったと言えるかもしれません。アメリカでは、黒人や先住民の音楽が徐々に認められていくなかで、文化そのものが多様化していくわけですが、ドヴォジャークはその一つのきっかけとなったのではないかと思います。チェコの内部においてもそうであったと言えるでしょう。チェコの作曲家として日本でも比較的良く知られているのは、スメタナ、ドヴォジャーク、そしてヤナーチェクの3人だと思いますが、そこからヘゲモニーの逆転について考えることができます。ちょっと単純化しすぎるかもしれませんが、例えば以下のような説明が可能かもしれません。チェコ国民楽派の祖と言われるスメタナは、頑張っって自民族の音楽を確立させましたが、その活躍は基本的にチェコの内部に留まっていた。だけど、ドヴォジャークの音楽は国際的に知られるようになり、当時のヨーロッパで中心的存在であったドイツの音楽を飛び越え、イギリス、そしてアメリカにまで到達することに成功した。しかしながら、欧米の聴衆がドヴォジャークに求めていたのは、結局のところエキゾチックな音楽、物珍しい音楽であって、既存の秩序を打ち破るようなものではなかった。これに対し、その後に出てきたヤナーチェクという第三の作曲家は、それまでのヘゲモニーを根本から崩してしまうような全く新しいものを音楽にもたらした。このように考えることができるのではないかと思います。

#### 大石高典：

先に村上先生からのコメントにお答えしたいと思います。バカ・ピグミーとバクウェレの事例は、ヘゲモニーの解消を目指しているというよりは、混じらずに、また決定的な対立を迎えないままに、ヘゲモニーをいかに平和なものにとどめておけるか、そういう話なのではないかと思っています。バカとバクウェレの間のヘゲモニーは、一方的に、固定的な形で実現されているヘゲモニーではありません。定住集落においては農耕民があたかも優位に見えるけれども、森のなかに入ったら、それはまったく変わってしまう。バクウェレとバカ・ピグミーと一緒に森にキャンプに行ったら、バクウェレはあまり森に詳しくないですから、やっぱりバカの人が採ったヤマイモを食べたいな、みたいな眼差しになったりするわけですね（笑）。そうすると、自然と言葉使いも変わってくるし、ちょっと下手に「お魚獲れちゃったんだけど、引き換えにヤマイモを分けてくれない？」というようなフレンドリーな感じになるわけです。

共に生きている空間の広がりの中に環境のヘゲモニーがあって、そこにうまく社会関係のヘゲモニーもリンクしている。ちょうど、栗本先生が狭間、樋口さんが隙間と言われましたが、逃げ場といますか、冗長性が担保された環境のなかで、この場ではこういうヘゲモニーにしましょう、みたいにバランスを変えながらヘゲモニーのゲームがなされている。ヘゲモニーの動的平衡ともいえるような状況がその都度作りだされているのではないかと思います。

では、いかなる条件で、ヘゲモニーが固定化されることなく維持されているのかという点ですが、一つは、熱帯森林の資源に対する信頼といますか、どこまでも森は続いているという——これも私たちの世界からすれば仮想現実であるわけですが——感覚があると思います。森が続いている限り、どこでも自分たちは行けるし、暮らしてゆける、という安心感ですね。ですから、例えば国立公園へは立ち入り禁止であるとか、ここまでがコミュニティの土地だから、といったようにゾーニング政策による土地利用の締め付けのような形でガバナンスが徹底されるようになると、このシステムは破綻するかもしれない、と思います。これまでのところは、カメルーンという国家がある意味、末端レベルで統治不全な状態であるおかげで、囲い込みが強制されることなくうまくいっているわけですが。

もう一つ、ゴリラのような動物が第三者として登場してくるということを、彼らが意識的にやっているのかどうか、というご質問ですけれども、これについては分かりません。しかし、ゴリラという動物は、彼らにとって非常に気になる存在だということは言えます。人間に似た格好で、なんでこんなに村に近づいてくるのか、という素朴な疑問があるようです。チンパンジーやゴリラの人間の生活圏への近接は、現代の霊長類学者も不思議に思っている点でして色々論争があるようです。そういったゴリラという存在に対する好奇心と、同時に、そのゴリラをネタにして、違う集団というか、人間との関わりを、楽しむというところがあると思います。いかに農耕民がひどくて意地悪い奴らなのか、といったことを表象するときに、「あのゴリラの奴、うちのバナナ畑全部駄目にしやがった」というような実話とセットで、盛り上げるといいますか、そういう楽しみがあります。そういう点では、ある部分、ゴリラを持ち出して会話の場を盛り上げる、というようなことは意識的にやっている側面があるかもしれません。

次に、栗本先生から頂いたご質問ですが、もちろん、どっちつかずの人々というのはいるのですけれども、たとえばバカでも、やたらと守銭奴みたいな人もた

まに在るわけですよ。カカオやゾウ狩りで儲けたら、お酒に換えたりとかタバコに換えたりして、ひたすらポトラッチ（競い合って贈与・消費する習俗）のような感じで蕩尽かと思うばかりに分配しまくるというきらいがあるのですけども、それをしない人がいるのですよね。あるいは、みんな勝手に自分の畑に入ってカカオ取ったら、ちょっと制裁を加えなければいけない、と言い出す人がいるのですが、そういう人は徹底的に馬鹿にされます。「あいつもだんだんゴリラみたいな顔になってきたぞ」といった感じで揶揄されます。どっちつかずの人々も、なんとなく二項対立を利用してそれぞれのアイデンティティのなかに回収されていくということが、バカ、バクウェレのそれぞれのコミュニティのなかであると思います。ただ、実態としては、狩猟採集民の人もかなり農耕をおこなっていますし、農耕民の人も狩猟採集をしていますから、実際には、もっとなだらかな分かれ方をしていて、きっちりと社会が分節しているということはないと思います。

また、動物と肉が同じ単語だということを説明しましたが、私の調査地域では、人間と動物のあいだの敷居はかなり低いと思います。それは良くも悪くも、彼らの表象実践を豊かにするという側面を持っています。「われわれ」の中に動物が入ってくることによって、関係性の変化のダイナミズムを作り出すのが人だけではなく、人と環境との関わりだということになると思います。それは、われわれの社会でも実はそうなのではないかという気がしています。

#### 岡田勇：

まず村上先生の、ボリビアを失敗事例として考えられるのかというお話について検討したいと思います。そもそもボリビアのヘゲモニーがどこにあるのかということもありますが、ヘゲモニーを逆転するか否かで成功か失敗かというふうに理解いたしますと、やはり失敗と端的にお答えできると思います。その失敗の原因は、主として外生要因、すなわち資源の価格がかなり流動的であって、しかもそれがダイレクトに影響を与えるということなのですが、それ以外に、もちろん国内にも失敗要因と言えるものが確かにあります。端的には、権力の集中が甚だしいことです。それは利益団体の側ではなくて、政府の側で権力の集中が甚だしいというところが一つの原因かと思います。

そもそも、ダイナマイトを持って街頭に出る人たちは必ずしも権力を求めているわけではありません。彼らは政党を作るといった形で政治勢力として自分たちの地位を築こうとするのかといったら、それも

していない。権力志向ではないわけです。これに対して政府の側ですが、若干印象論的ではありますがけれども、一党優位体制の傾向が強いように思います。本来資源ナショナリズムを進めるはずの与党は、過去に三度の選挙で勝っていますし、また、議会でも三分の二をとっているのです、法律を作るという点では向かうところほとんど敵なしの状況です。そこで、そういうものに対して、どのように対峙するのかというのが利益団体の行っていることだと思うのです。政府にあまりにも権力が集中していて、とても強そうに見える。そのために、おそらく利益団体にとって非常に問題となるような、影響を与えるような政策が作られる可能性が非常に高いと思われる。そういったものが、対立的な関係を助長している、ということは言えるかもしれません。ただ、翻って、じゃあなんでその一党優位体制といいますか、権力の集中が起きているかということ、それはやはり、すべてでは決してないのですが、資源価格の上昇によって経済的に潤っていたというのが、やはり間接的に効いているという点は指摘したいと思います。

続いて栗本先生のご質問ですが、おっしゃるとおり、利害の問題は大きいと思います。ボリビアでは、利益団体と政府との関係、具体的には、労働組合の幹部と政治家、たとえば大統領との関係が非常に近い、という点が指摘されています。また、何か政策が実施されようとしたら、それに対してすぐにリアクションが起きて、それに対してすごく早いスピードでデモとか抗議運動とかが起きている。ただし、それがボリビア全体に対する何らかの政策ヴィジョンにつながっているかということ、そうではないという状況があります。

例えば、協同組合の幹部にインタビューを行うと、非常に警戒されますし、会話も緊張感に満ちたものになります。なぜ緊張するかと言いますと、全てではないにせよ彼ら自身が、私利私欲のために行動していることを自覚しているからです。ですから、すごく微妙な会話になるわけですが、彼ら自身は、われわれは極めて民主的だということを言うのですね。なぜ民主的かということ、その協同組合の代表は2年任期ですが、各地区の代表が集まって行われる数千人規模の総会で彼らは選ばれる。そして、候補者になるのは、各地区で幹部の職を一步一步上がってきた人たちである。次の代表が誰になるかは大体分かっているにしても、それを最終的に承認する時には、何千人ものリーダーたちが集まるなかで投票で決めるんだ、つまり非常に民主的なやり方で決めるんだ、と言うのですね。極めてインフォーマルで家族的な経営をやってきて、しかも場合によっては不法占拠

をやるような人たちが、このように民主的な形を重視するというのは極めて興味深い例であります。

組合のリーダーたちは、自らの利害に関わることに非常に敏感なのですが、個人的に話をする際には冷静です。何ができて何ができないのか。たとえば法律を守らなければならないというの、ある程度感覚的にあって、まったく税金を払わないのは交渉では受け入れられないだろうとか、そんなことが意識されています。こうした行動様式は、ボリビアの歴史のなかで培われてきた組合主義だと解釈されることもあります。彼らは実際、大統領あるいは大臣などと密室のなかで個別に交渉しています。外で行われているデモとかダイナマイトを使った行進というのは、一種のスペクタクルなんですね。そこは非常に民主的な状況で行われるのですが、じゃあ実際に交渉の中身を決める段になると、密室に入っていく。交渉自体、1週間ぐらい待たされて、その間ずっと道路封鎖が続くのですが、そのあとで呼ばれて、密室の中に入って決まる。決まった内容というのは、その労働組合の構成員の権利を保障するものだというんです。じゃあ本当にそれが構成員の利益を最大化しているのかというと、おそらく労働組合の幹部たちは、実はそうではないことは分かっています、実際、新鉱業法の中身をよく見ると、それぞれの利益団体の要求が100%通っているわけでもない。望ましいかどうかは別として、これが彼らなりの——ボリビアの幹部たちの言葉を使えば——組合主義的な交渉のやり方でして、一見暴力的・直接的・短期的に見えるものの背後に存在しています。

## 個々の報告に関する議論

柳澤雅之（司会、地域研）：

少しずつヒートアップしているような印象ですが、どうぞフロアのほうから、質問・コメント等ありましたら、よろしくをお願いします。

## 樋口報告について

会場参加者 A：

サンシャイン計画のように、世界各地の放射能汚染を調べるという大規模なプロジェクトは結局のところアメリカしか実施しなかったわけですが、他の国、例えばイギリスやフランスはそのようなプロジェクトを持たなかったのでしょうか。また、国連科学委員会——「原子放射線の影響に関する国連科学委

員会（UNSCEAR）」——は、独自の動きを見せていたのでしょうか？

それからサンシャイン計画の後の時代ですが、例えばチェルノブイリ原発事故や最近の福島原発事故に関して、地域毎の汚染を比較検討するようなプロジェクト、つまり眼差しと言えるものは存在するのでしょうか。



樋口敏広：

全面核戦争に備えるというのが、アメリカがサンシャイン計画を始めた当初の理由だったわけですが、イギリスなど他の国では、そういうことはあり得ないという認識が一般的でした。ですから、アメリカがサンシャイン計画に対するイギリスの協力を取り付けようとしたときには、そんなことよりも限定核攻撃による食料汚染について調査をすべきだという批判がイギリス側からなされています。

逆に国連科学委員会については、核実験の被害をこうむる国からの要請を受けて動くという側面があります。特にフランスの場合、サハラ砂漠で核実験を行ったことから、アフリカ諸国が汚染を独自に測定したいと主張して、国連科学委員会に支援を求めたりしています。そして、その国連科学委員会の要請を受ける形で、イギリスやフランスがデータの標準化や共有化を進める形となりました。

チェルノブイリやフクシマは重要な点だと思えます。これらの原発事故についても厳密に言えば汚染が地球レベルに拡散していることになるのですが、それが世界的なレベルで注目されたり、可視化されたりという状況ではありません。それぞれの地点で個別に放射能を計測している限りにおいては、汚染といっても自然放射線の変化量のなかに収まってしまいう程度だったりするので、特に問題視されるわけではない。しかし、それが自分に関わる問題として認識されると、人々の意識が急に高まったりもする。つまり、実態としての放射能汚染の問題と、それを

見る眼差しとの関係については、原発事故なども絡めて比較検討していく必要があるかと思います。

#### 会場参加者 B :

アメリカのガブリエル計画やサンシャイン計画は、非公開あるいは秘密裏に行われていたのでしょうか。また、ソ連と中国についてはデータ収集の対象から外れていたようですが、その辺りの事情についてもお伺いできるでしょうか。

#### 樋口敏広 :

ガブリエル計画やサンシャイン計画は、当初は最高機密の扱いでして、私の報告のなかで紹介したデータにも機密資料が含まれています。これについては批判もあって、オープンに実施したほうが、世界中の科学者がむしろ自発的に協力してくれるんじゃないかという意見も出ていました。しかし、公にそれをやると国際的な政治問題になるということで国務省が猛反対した経緯がありまして、それで最初は、アメリカ自身が有する国外の外交的・軍事的インフラやネットワークを使ったというのが実情です。つまり、アメリカはこっそり測定を行っていたわけで、場合によっては、自然界に普通に存在するラジウムの分布を調べているといった嘘の理由を使ってアプローチすることもありました。

ソ連と中国がデータ収集の対象から外れたというのも以上の理由によります。ただし、ビキニ事件の後、先ほどの質問で取り上げられていた国連科学委員会が発足しまして、各国連加盟国からデータを集めるという作業が始まりました。ソ連のデータはサンシャイン計画ではなく国連科学委員会経由で入るようになるのですが、当時の中国については代表権問題が絡んでいた関係で、大陸中国のサンプリングは実施されませんでした。例えばインドは大陸中国のデータを強く要求し、同国の国連大使も、これは地球規

模の問題だから東西なんて言ってる場合ではないと演説をぶったりもしたのですが、結局、そのままとなりました。

## 福田報告について

#### 会場参加者 C :

ドヴォジャークについてのご報告でしたが、例えば、ポーランドのショパン、ハンガリーのリストについても同様の点は指摘できるのでしょうか。また、ドビュッシーは日本のお寺の鐘の音をモチーフにした曲を書いていますし、プラームスの《二つのラブソディー》にはサクラ・サクラに似たメロディーが出てきますが、西欧の作曲家についても「辺境」の音楽を好んで使う傾向があったように思います。こうした眼差しのせめぎあいはドヴォジャークだけの問題だけではないと思われませんか？

また、進化や退化といった言葉が出てきましたが、ドヴォジャークのような作曲家やその作品についても、いわゆる社会ダーウィニズムの影響が見られるのでしょうか。

#### 福田宏 :

ご指摘のように、フランスの印象派音楽にはジャポニズムの影響が出ていますし、他の国の作曲家にも異国趣味の傾向は多かれ少なかれ見られます。音楽におけるオリエンタリズムの問題ですね。ここで興味深いのは、フランスやドイツといった西欧の作曲家だけでなく、チェコやポーランド、あるいは日本など、見られる側にあった地域の作曲家が自らの「物珍しさ」を強調する作品を作っている点です。ドヴォジャークの《スラヴ舞曲集》は一つの例と言えるかもしれません。けれども、自らのエキゾチズムをアピールし、ある意味では自らを卑下するような姿勢を見せつつも、その裏側には、自分たちの文化は劣っていない、自分たちの音楽はドイツ音楽に負けるようなものでは決してない、といった強烈なプライドが隠れていたりします。もちろん、この時代の作曲家が等しく同じようなナショナリズムを共有していたわけではありません。ご指摘のあったショパンやリストといった作曲家だけを見ても、彼らが生きた時代や地域、芸術家としての彼らの人生が異なる以上、音楽をめぐる眼差しには多様なヴァリエーションが見られたと思います。その点では、日本人を含む当時の作曲家について、眼差しを比較検討する作業が必要ですし、私としてもやってみたくて考えているところですが、今のところはできていない



というのが現状です。

また、社会ダーウィニズムの問題も重要な点だと思います。19世紀末の段階では、いわゆる弱肉強食とか適者生存といった概念が一般のレベルで広く共有されるようになりましたが、音楽もまた、そうした発想で捉えられるようになったと言えます。この時期に成立した音楽人類学では、未開人の原始舞踊が文明化によって普遍芸術に進化していくと考えられたのですが、仮にその枠組に従うとすれば、ドヴォジャークは、辺境民族の文明化を音楽の面から実現した功労者ということになります。ただし、それは依然として発展途上の段階にあり、普遍芸術から見れば劣ったものに過ぎないという位置づけでした。

## 大石報告について

### 会場参加者 D：

基本的なこともかもしれないのですが、バカとバクウェレは体格的にどのくらい違うのでしょうか。また、バクウェレのほうが人口が少ないというお話でしたが、そうした人口集団の差や体格の問題が、分離的共存を可能にしている側面はあるのでしょうか。

### 大石高典：

体格の問題ですが、ピグミー系狩猟採集民は一般的に背が低くて、バカについても男性で150cm台後半が多いです。それに対してバクウェレの人たちは大体165～170cmぐらいが一般的ですね。かなり以前から、熱帯森林地域の農耕民の血にはピグミーの血がかなり混じっているということが明らかになっていますが、森のなかの農耕民を見ると、確かに背は低いです。人口に関してですが、いまだに悉皆調査が実施されたことはなく、推計はかなりいい加減なものでしかありません。また、コミュニティによって人口比はかなり異なります。私の調査村では、た



またま狩猟採集民のほうがかなり多いですけれども、そうでない地域もあるので、一概に人口の数の差によって、その民族間のパワーバランスが説明できるということはないと思います。

### 会場参加者 E：

人が動物である、それから人が動物になるという感覚ですが、これは彼らの持っている世界観のレベルでも同様のものがあるのでしょうか。また、大石さんが指摘された分離的共存と、ご報告の中で紹介されたギャラティの「排除による統合」ですが、両者の違いは何かという点。さらには、この分離的共存という概念は都市部でも適用できるのかという点について教えて頂けるでしょうか。

### 大石高典：

人が動物になるという世界観ですが、これはあると思います。ゾウとゴリラについて特に顕著ですが、私よりも10年以上前に調査に入ったジョアリという研究者によれば、以前は様々な小動物についても、同様の観念を持っていたようです<sup>2</sup>。そこで、人が動物になるときに妖術的なものが関与するかどうかというところがポイントで、もしそうだとすれば、農耕民が持っていたイメージを狩猟採集民が取り込んだ可能性も考えられます。この点については、まだ研究の余地があるかなと思っております。次の、ギャラティのモデルと分離的共存との違いに関してですが、後者では完璧な排除を行わないということが相違点かと思います。たとえば生業面において、バカが農耕することをバクウェレが積極的に排除するという事は、まったくありません。また、バカもジェンギという大変重要な精霊儀礼を有していますが、それに農耕民が入りたいと言っても、排除するという事はありません。そういった形で、さまざまな重複を持ちながら、だからといって、同一化しないという点がユニークであると思います。混ざり合い、親密な関係を維持しながら、それと同時に分離的な共存をなしているという点において、ギャラティのモデルとは異なるのではないかと思います。最後の、都市における分離的共存という点ですが、最近では、ピグミーの人たちも結構都市に進出してきておりまして、私自身も関心を持っています。今後、調査の対象としてみたいと考えております。

2 D. Joiris, *La chasse, la chance, le chant: Aspects du système rituel des Baka du Cameroun* (Thèse de Doctorat: Faculté de Sciences Sociales, Politiques, et Economiques, Université Libre de Bruxelles, 1998).

## 岡田報告について

### 会場参加者 F :

ボリビア鉱業においては、協同組合が大きな鍵を握っているように思いました。通常感覚からすれば、ボリビアの協同組合は特異な存在であるように思われるのですが、協同組合法などのルールはどうなっているのか、また、どの程度それに忠実に運営されているのでしょうか。

また、外国からの影響についても気になりました。例えば、多国籍企業などの国外資本がボリビアにどのようにアプローチしているのか、あるいは、していないのかについて教えて頂けるといいでしょうか。

### 岡田勇 :

協同組合については、基本的には協同組合法に基づいて活動するというのが建前です。しかし、鉱業はボリビアの主要な産業ですから、1985年に価格が下落した際、鉱業に関する協同組合については、非常に曖昧かつ政治的な形で特権を与えたという実態があります。そもそも、同国では法治主義の実効性が弱いという点も挙げられます。現在では、鉱業の協同組合が明らかに過剰な利益を生み出していて、協同組合法の範疇から逸脱するようなケースも多々見られるのですが、そこに政府は介入できていないというのが現状です。

外国からの影響に関してですが、1990年代から今日にかけて、ほとんど民間投資が入ってきておりません。ただし、天然ガスについては2000年代初頭に大きな投資流入ブームがありましたから、ボリビアに関心がないわけではない。しかし、政治的なファクターが強くてリスクが高すぎるというのが現状です。最近の外資の発言を見ても、どんなに民間投資のインセンティブがあったとしても、政治的な決定が極めて短期的に、しかも国内の予測できない要因によって左右される状況では、なかなか手を出せない、という意見が見られます。

### 会場参加者 G :

ボリビアの鉱業をめぐるせめぎあいは失敗例とのことでしたが、レント収入がかなりあるような産業分野で、利害が鋭く対立し、規模も異なる複数のセクターが併存する状況というのは、実はかなり色々なところであるわけですね。先ほど質問があった協同組合についても政治的に色々な面がありますし、それから、非効率だけれども膨大な労働者の生計の維持には非常に役立っているんですね。様々な形で

対立を繰り返して、まったく論理的には説明できない共存かもしれませんが、ちょっと引いて見てみると、全体として一種のシステムを形成しているとは言えないでしょうか。鉱業は国際的な要因で価格が大きく変動する分野ですから、その変化によって、ある部分が潰れて、ある部分は生き残る、という側面も見られますが、他方では膨大な雇用を生みだし、さらには一定程度の外貨も稼いでいる。政治的にはかなりマイナスだけれども、ある種のシステムが存在しているとは考えられないでしょうか？



### 岡田勇 :

おっしゃるとおり、そのような対立を含むシステムとして理解できると思います。外貨獲得という点では私は少し疑問を持っていますが、雇用を生んでいるという点、生計の手段になっているという点、さらには、資源価格の変動があるなかで、緩衝材といえますか、彼らの生産方法には弾力性があって、たとえば、つるはしで石を掘ればいいわけで、そういった点で急激な変化があっても対応は可能であり、なおかつそれが生計の手段にもなりますし、彼らが持っている土地というものとも結びついています。ボリビア政府の上のほうの人と話す機会があったのですが、彼らもそういうものが消滅するべきだとは見なしておらず、一種のシステムとして捉えているようにも見えます。しかし、それが望ましいシステムかどうか、あるべき均衡なのかどうかと問われると、望ましいとは言い切れない、むしろ失敗なのではないかと思います。

たまたま協同組合の末端で働いている労働者と話す機会があったのですが、資源価格が下がっていく中で、彼らは六人ぐらいのグループで協同組合を出て民間鉱山に行こうとしていたんですね。今の協同組合でいくら稼いでいて、民間鉱山に行ったら給料は増えるのかとか、家族のこととか色々話をしたんですけど、私がまったく理解できなかったのは、協同組合という枠組が彼らにとって何を意味してい

るのか、という点です。はっきりと対立的な関係が形成されていて、それ自体はシステムとして機能していて、ある意味彼らの生計の手段となっているんですが、その枠組というものが、本当に彼らにとって望ましいものなのか。アクター間の対立関係が激しくて、もしかしたらあり得るかもしれない別の可能性を消しているのではないか。結局のところ、このシステムにおいては均衡がもたらされるわけでもなく、新しい秩序ができるわけでもない。その点で失敗例と位置付けられるのではないかと思います。

## ワークショップ全体に関する議論

柳澤雅之（司会）：

様々なご質問をいただきありがとうございます。では、全体に関わる問題について考えていきたいと思いますがいかがでしょうか。

大石高典：

少タイレギュラーですが、報告者から問題提起をしてもよろしいですか？ 先ほどの栗本先生のコメントにも関連しますが、研究者自身の眼差しについても考えるべきではないでしょうか。言うまでもないことですが、私たち地域研究者も眼差しの多様なせめぎあいに巻き込まれているはず。地域研究者にしても、超然とした立場から地域を見ているわけではなく、自分の出身地域や生活基盤を置く地域に縛られているわけです。つまり、研究者自身の存在被拘束性ですね。そうしますと、人間である私がゴリラの眼差しを捨象してしまっている点で、私はゴリラ研究者から批判を受けるかもしれません。私たち四人の報告が、自身が持っている「眼差し」というものを相対化するようなものになっていくかという、実際のところは他人事のようにして語られていた面もあったのではないかと思います。地域研



究者の眼差しをどう捉えることができるのかということ、ここで確認しておいたほうが良いと思います。

柳澤雅之（司会）：

ところで、大石さん自身は他人のようなつもりで話をされたのですか？

大石高典：

私は全然そういうつもりはなかったです。ただ、研究者として話をするというときに、やはりあたかも客観的に物事を見ているようなフリをしてしゃべりがちだ、というのはあると思います。もちろん、それとはまったく別な眼差しを私なりに地域に対して持っています。例えば、今日お話したゴリラと人の関わりについても、人と動物の関係を問題にしながら論文を書きましたけども、執筆の意図は、人と動物を完全に切り離して管理したほうが良いという自然保護の論調に対抗する気持ちを込めて書きました。論文の本文では明示的に述べていないのですが。

柳澤雅之（司会）：

では、他の三人の報告者にも聞いてみましょう。今、大石さんが言われたように、自分としては他人事でやったのかやってないのか。たぶんやってないと言われるでしょうけど（笑）。

福田宏：

この点は、ワークショップの準備段階から大石さんから何度も指摘を頂いていた点でした。私自身は研究対象と一定の距離を保っていることが多くて——これは私が専攻する歴史学や政治学といった分野といわゆる地域研究との違いかもしれません——時として他人事のように語ってしまったり、あるいは、無責任に語ってしまったりしているように思います。その点は反省点なのですが、研究対象との距離については常に注意している点でもあります。具体的な書名を出すのは控えたいと思いますが、最近、プーチンとサシで話ができるという研究者が書いたロシア政治の本を読んだのです。地域の政治を研究するうえでは、当然のことながら人脈が重要でして、その国のトップと直接話ができるというのは大変なことだと思います。しかし、その本を読んでびっくりしたのは、著者がプーチンの代弁者のような形で主張を展開していたことでした。これは極端な例かもしれませんが、研究対象と同一化してしまうというのも問題ではないかと思います。

また、今回の報告では、百年以上前のヨーロッパとアメリカを取り上げたのですが、地域と地域の狭

間というトピックは、私たちが生きている日本社会にとっても決して無縁ではないと思います。最近のテレビを見ていて非常に気になるのは、日本のものづくりとか、世界が驚く日本とか、やたら自国を賛美する番組が増えているように見えることですが、一昔前であれば、ここがヘンだよ日本人とか、日本が遅れているとか、自らの自信のなさを露わにするような番組が主流だったように思います。こうした変化は、日本が国力を増して自信を深めた結果というよりは、以前からのコンプレックスが、最近では反転した形で、しかも強化された形で表れてきた結果とも考えられます。つまり、欧米かアジアかという明治期以来の問題、あるいは、欧米とアジアの狭間という立ち位置に日本社会は依然として囚われている。そういうことを改めて考えざるを得ないわけですが、その点において、ドヴォジャークの事例は決して他人事ではないと思うのです。ですから、地理的に離れた過去の事例について距離感に注意しながら語りつつも、実のところ、自らの所属する社会はどこに向かおうとしているのかを考えている。それが私自身の立ち位置です。

#### 樋口敏広：

私は歴史の研究者ですが、歴史学においては、研究対象としての過去を観察しているにもかかわらず、研究対象は私に視線を投げ返せないという一方的な側面があります。しかも、私自身はアメリカに12年いましたので3.11自体を経験してないんですね。私は10年以上低線量被曝の問題を研究しているのですが、フクシマの現場に直接関わっていたわけでもないのに、何とも不思議な立場にあります。その点では、私の報告は他人事になっている部分があるかもしれませんが、ただ、存在被拘束性という問題は重要でして、拘束されている点を意識しつつ、それをさらに広げて考えていくことが必要だと思います。例えば、私がアメリカで被爆の問題を扱っていると、「君の国は広島・長崎だから」と言われてしまうのですが、私自身は個人的にはまったく関係がないんです。しかし、向こうからそう見られているという点をむしろきっかけにして、でも自分はこう思うといった形で議論を発展させていく。被爆という問題を扱う以上、日本においてもアメリカにおいても、様々な拘束性がつきまとうわけですが、むしろ、それをプラスの材料に換えていくことが大事なのではないかと思います。

#### 岡田勇：

外部者として見ることは必要だと思います。

同じ分野の研究者とも話をしたことがある点ですが、資源に関しては、当事者たちの置かれているコンテキスト自体が大きく変動してしまうので、最初にまず、彼らがどういう状況に置かれているのかということに注意深く判断する必要があります。その点が、私自身の研究テーマでもあります。そのため、当事者がどのようなコンテキストに置かれているのかという点を、ちょっと引いた立場で、つまりは外部者の立場で見ようとしています。もちろん、私自身が完全なる外部から、いわば隔離された状況から見るということは有り得ません。彼らに対する実地の調査を行うだけでなく、私自身が考えたことについても彼らと議論しますので、その意味では完全に外部というわけではないのですが、いずれにせよ、今の自分の研究テーマに即して考えれば、外部者としての立場だと思います。



#### 柳澤雅之（司会）：

ありがとうございます。大石さんが報告者の立場を越えて問題提起してくださって感謝しています。ただ、私も司会の立場を越えてちょっと言わせていただくと、地域の代弁者という言い方に、やはり若干の不遜さを感じる場所があります。それは、アメリカがヘゲモニーを持つのだという言葉聞いたときに感じる不遜さと似ているところがあって、実際のところは、そんなことはできないのではないかと。だから、そのどこかで落としどころを見つけて自分の守備範囲でやってくことになるだろうというのが、私自身の考えです。

#### 大石高典：

私は、外部からモノをいうことが悪いとか、イミミックな視点を持たなきゃ駄目だとか、そんなことを言いたいわけではありません。ただ、われわれが持っている研究対象への眼差しと自分に対しての眼差しは不可分だと思うのですが、それをもっと引いて見てみるという機会が必要だと思います。いかに



外部者としてとどまろうとしても、やっぱりアクターとして地域に関わっているわけですから、それが全体として、どんなダイナミズムになっているのか。その点について考えるべきではないでしょうか。

**柳澤雅之（司会）：**

正にその点に関して話をしたいと考えておりました。大石さんの話のなかに出てきましたが、生態的なヘゲモニーのようなものがあって、社会的なヘゲモニーがそれによって影響を受けるケースがありましたね。魚を獲った狩猟採取民に対して農耕民がすり寄っていくといった話です。今日の報告では、ヘゲモニーや力の不均衡といったキーワード的な言葉が出てきたと思うのですが、他方では、一方的な力関係ではない形についても可能性が示唆されていたと思います。つまり、生態的にしろ社会的にしろ経済的にしろ、様々なヘゲモニーが交差することによって、あるいは、民族集団のようなアクターが増えることによって、力関係が多層化し、一方的なヘゲモニー関係のようなものはなくなっていく。そのように考えることは可能でしょうか。

その点に関連しますが、「せめぎあう眼差し」という今回のワークショップにおいては、「眼差し」そのものではなく「せめぎあい」が重要なポイントになっていたと思います。栗本先生より、眼差しについては20年前に既に議論したとのコメントがありましたが、今回のワークショップでは、せめぎあうことによって何が起きるのかという点に議論が進んできたと思います。せめぎあいの場を増やすことが、ヘゲモニーとか力の不均衡とは違う方向性を生み出すことにつながるのか。その点について皆さんの御意見を伺えるでしょうか。

**樋口敏広：**

栗本先生からご指摘があったように、主体の客体化、そして客体の主体化という点ですが、地球規模のシステム・リスクに関して言えば、アメリカも結局のところはグローバルな分布曲線のなかに位置してしまっている。報告ではハイブリッドという表現を使いましたが、主体と客体の両方が変化しつつ、アメリカも自らそのなかに取り込まれているわけです。アメリカが向こうを見ているという側面、つまり眼差しの側面もありながら、その見ている私と見られているあなたの双方が同じリスクというコンディションのなかに回収されている。ただし、ウルリッヒ・ベックのように、伝統的な地域はもはや意味をなさないというわけではなくて、やはりハイブリッドなんじゃないかなと私は思います。その意味

では、せめぎあう眼差しの主体と客体のあり方自体は依然として存在するけれども、それが変わりつつあるのではないか、それが私のテーマと言えます。確かにアメリカは神の視線のように見ている——偉そうに見ている——わけですが、実は自らもリスクに晒されているという恐ろしさがあるわけですね。だからこそ全世界を知りたいという動機になるわけです。そこから離れて見ているというよりはむしろ、本当に関係性に囚われてしまっているというか、そういう危うさがあるという意味で、自信のない主体と言えるでしょうか。自国の中ですら、再編成されてミネソタとかがリスク・コミュニティとして出てきます。そういう意味では、主体と客体のあり方というのが、今までのようには簡単には見られないということになります。

**福田宏：**

カメルーンについての大石さんの報告でトムとジェリーが出てきましたね。それが大変印象に残っているのですが、仲は悪いんだけど、非常に狭い範囲のなかでせめぎあっていて、その関係性が維持され続けているというのは重要な点だと思います。たとえばハンガリーとスロヴァキアという隣り合っている二つの国ですが、EU加盟国のなかでは最も仲が悪いというふうに言われています。でも、スロヴァキア南部のハンガリーと接しているところでは、ハンガリー系マイノリティーがたくさんいて、多くの住民がスロヴァキア語とハンガリー語の両方を話すバイリンガルの地域になっています。この地域については、色々問題はあるにせよ、割と仲良くやっているわけですね。これに対して、威勢の良いスロヴァキア人ナショナリストの多くは北部など実際にはハンガリー人と接する機会のない場所に住んでいます。つまり、机上の空論でナショナリズムに走ってしまうわけですが、これと同じことが日本についても言えるのではないかと。日本で威勢の良いことを言う人たちの多くは、韓国や中国と実際にせめぎあう機会を持っていないのかもしれない。もちろん、アクターがせめぎあうことによって様々な摩擦が発生することは事実ですが、その摩擦の先——言うまでもなくそれがバラ色の未来を約束するわけではありませんが——を目指すことが何よりもまず重要だと思います。

**大石高典：**

私も福田さんのコメントと同感なところがあります。もっとガンガン、インタラクショナルを楽しむような眼差しの応酬があったら良いのではないかと

います。地域はどうしたらもっと逆襲できるか、などということを行いました。

**岡田勇：**

私もそのせめぎあい重要だということには賛成です。ただ、私が実際にボリビアの事例を見ているときに感じるのは、さらにその先で、せめぎあいをしているところをどういうふうに見ればいいのか。激しすぎる対立とか、さらには人が死んでいるというような状況があるなかで、じゃあそれをどういうふうに解釈すればいいのか。そこでは、もうはっきりと私は当事者ではありませんし、当事者になりたいという気持ちもありません。でも、そこで起きていることはリアルな一つの交渉のかたちであるわけです。実際ボリビア人の研究者だと、明らかにそれは暴力的な不法行為だとレッテルを貼る人もいれば、でも他方で、それは彼らなりの交渉のやり方なんだ、関係性の作り方なんだ、一種のシステムとして理解できるんだという人もいます。それが何なのかは、私自身も答えを持っていないことが多いのですが、だとしても、そのことをよりよく理解することは重要です。それを理解することなく地域を見るということが、ネガティブなものを生むこともあるし、逆にいえば、ポジティブなものを失っているということにはよく感じます。

たとえば、政治的なリスクが高いからといってボリビアへの投資を敬遠する企業がありますが、では、ボリビア人がそんなに資源ナショナリズムが好きなのかということ、私はそうでもないと思うんですね。問題は、ボリビアがどういった論理で交渉しているかを理解せずに、安直に資源ナショナリズムとか政治的なリスクが高いとかいった話で説明するのはまずいのではないかと思います。汚職に手を染めろということじゃないですけども、そういったことを学ぶことは必要だという印象を持っております。

**柳澤雅之（司会）：**

皆さん、誤解を恐れずにせめぎあいを随分、強調していただきましたが、地域研究の現場に関わっておられるからこそ、せめぎあいのプラスの側面を積極的に押し出されたのではないかと理解します。もう時間が過ぎましたので、これでワークショップは終わりにしたいと思います。報告者の皆さん、コメントターの皆さん、そしてご参加頂いた皆さん、本日はどうもありがとうございました。

最後に、地域研究統合情報センターの貴志俊彦・副センター長に閉会の挨拶をお願いします。



**貴志俊彦（地域研・副センター長）：**

副センター長の貴志でございます。正直なところ議論の時間が足りなかったようにも思うのですが、4時間半にわたって意見を交わしていただきましてありがとうございます。ワークショップの冒頭でセンター長が申し上げたとおり、地域研には、相関地域研究、地域情報学プロジェクト、災害対応の地域研究という三つのミッションを有していますが、今回は相関地域研究の一環として話をまとめていただきました。まず報告者が決まり、報告題目が決まり、そして統一テーマが決まっていくという、そういうダイナミックな準備のプロセスのなかで、そして、共通の課題を検討していくなかで、どういうふう地域研究の種が芽生えていくか、育っていくかということ、私共もこの企画に携わっている人間として見てきたわけです。地域研の設立から10年経ちましたけれども、地域研究の方法・素材・目的は実に多様であり、それがさらに広がってきているということは、本日、しっかり目に焼き付けることができましたと思っています。これも関係者の皆さんのおかげだと思います。どうもありがとうございました。

# プロフィール (50音順)

---

## 福田 宏 (ふくだ ひろし) (編者)

1971年生まれ。北海道大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。博士(法学)。同スラブ研究センター助教、在スロバキア大使館専門調査員、京都大学地域研究統合情報センター助教等を経て、現在、愛知教育大学地域社会システム講座講師。専門は、比較政治学、中央ヨーロッパ地域研究。

## 柳澤 雅之 (やなぎさわ まさゆき) (編者)

1967年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。博士(農学)。現在、京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門は、ベトナム地域研究、土地利用研究。

## 大石 高典 (おおいし たかのり)

1978年生まれ。京都大学大学院理学研究科研究指導認定退学。博士(地域研究)。総合地球環境学研究所プロジェクト研究員等を経て、現在、東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師。専門は、アフリカ地域研究、生態人類学、文化人類学。

## 岡田 勇 (おかだ いさむ)

1981年生まれ。筑波大学人文社会科学研究科博士課程修了。博士(政治学)。日本学術振興会特別研究員(PD)(京都大学地域研究統合情報センター)を経て、現在、名古屋大学大学院国際開発研究科准教授。専門は、比較政治学、ラテンアメリカ地域研究。

## 栗本 英世 (くりもと えいせい)

1957年生まれ。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、国立民族学博物館を経て、現在、大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は、アフリカ民族誌、紛争研究。

## 樋口 敏広 (ひぐち としひろ)

1978年生まれ。米国ジョージタウン大学歴史学部博士課程修了(Ph.D. in History)。京都大学白眉センター/法学研究科特任助教等を経て、現在、ジョージタウン大学外交学院(SFS)助教。専門は、近代環境史、科学史、国際政治史。

## 村上 薫 (むらかみ かおる)

1967年生まれ。東京大学文学部卒業。現在、アジア経済研究所主任研究員。専門は、トルコ地域研究。

CIAS Discussion Paper Series No.56

編・著 福田 宏・柳澤 雅之

## せめぎあう眼差し

— 相関する地域を読み解く —

発行 2016年3月  
発行者 京都大学地域研究統合情報センター

〒606-8501  
京都市左京区吉田下阿達町46  
電話：075-753-7302  
FAX：075-753-9602  
E-mail：ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp  
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University  
Yoshida-Shimoadachi-cho 46, Kyoto, 606-8501, JAPAN  
TEL +81-75-753-7302, FAX +81-75-753-9602, <http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>  
March, 2016





 **CIAS**  
Center for Integrated Area Studies,  
Kyoto University

京都大学 地域研究統合情報センター